

2012 年度前期学校ボランティア活動レポート集

目 次

土屋小学校・前期

1. 「成長」とは～自己表現の違い～	佐藤真由香	168
2. 授業外の活動の工夫	刈部 真里	169
3. 積極的に関わることの大切さ	酒井 翔平	170
4. 変わった自分	松井公拓朗	171
5. ボランティアから得られた経験	松島 勇太	172
6. 印象や決めつけを持たず、 常に新鮮な視点からみていくことの大切さ	栗原 史帆	173
7. 子どもと一緒に成長できた自分	中島嵯恵子	174
8. 立場が変わって気付いたこと	栗林 安幸	175
9. 見えない配慮の大切さ	蓼沼 礼敬	176
10. 児童の社会力・自立心をどう育成するか	宮下愛梨彩	177
11. 子どもの目線に立つ	柿澤 拓也	178
12. 児童と接すること	上條 順絵	179
13. 改めて小学生の指導を感じて	小嶋 啓喬	180
14. 自分らしくあることの大切さ	笹島 瑛梨	181
15. 今になって見えたこと	柴崎 潤平	182
16. 学校っておもしろい	続橋 直弥	182

17. 発見と課題～初めての学校ボランティア～ 中山 直之 183

みずほ小学校・前期

18. 今後自分が心がけることー抑揚と積極的に話すことー 福田 晋也 185

羽沢小学校・前期

19. 教師のあり方 佐藤 彩香 186

土沢中学校・前期

20. ホームページ作成 奥村 友崇 187
21. HPを運営する側としての心がけ 羽田 基子 188
22. 学力の二極化にどのように立ち向かうか 四ツ家大祥 189
23. 教えるということの難しさ 小椋 光 190
24. 積極的に学習に取り組ませるために 工藤 若菜 191
25. 教師の目線 生徒の目線 南 佳奈 192
26. コミュニケーションの重要性 松本 隆大 193
27. 学校ボランティアから得たもの 松本健太郎 194
28. ボランティアを通して 佐々木大輔 195
29. 生徒中心の授業づくり 清水 弓佳 196
30. 「1クラス, 生徒・数十人」をどう捉えるか 堤 有起子 197
31. 学校ボランティアでの経験 永見 宏樹 198

3 2. 生徒が私に教えてくれたこと	大月あゆみ 199
3 3. 先生から生徒へ、生徒から私へ	水戸 紘子 199
3 4. 立場の重さ	丸山彩恵子 200
3 5. 教師の夢への第一歩	和地 翔平 201
3 6. 学校ボランティアをして分かったこと ～授業をする難しさ～	一ノ瀬智弘 202
3 7. 生徒との関わり	島田 諭 203
3 8. 授業で大切なこと	鶴間 貴之 204
3 9. 新しい視点から見えたこと ～先生になるのに必要なこと～	矢部 丈登 205
4 0. 教育者の立場から見た教育現場	西村 義樹 206
4 1. 学校ボランティアで得た有意義な時間	加藤 諄 207
4 2. 意識を変える	傳田 貴彦 208

土屋小学校・土沢中学校・前期

4 3. 教育環境を整備する力と子どもに接する力	田中 浩貴 209
--------------------------	---------------------

みずほ小学校・土沢中学校・前期

4 4. 自ら集団へ働きかけることの大切さ	小松 祥子 210
-----------------------	---------------------

土屋小学校・前期

1. 「成長」とは～自己表現の違い～

国際経営学科 科目等履修生 佐藤真由香

私は土屋小学校へ学校ボランティアに行った。全部で3回、学校ボランティアに午後から行った。最初の2回は六年生の教室に入った。一緒に給食を食べ、掃除のサポートをし、昼休みは児童と遊び、5時間目と6時間目は授業見学をした。最後の1回は1年生の教室で給食を食べ、昼休みは児童と遊び、5時間目と6時間目は4年生と5年生の音楽の合同授業を見学し、学校内の畑を採検するという流れである。

私がこの学校ボランティアで感じたことは「成長」ということである。偶然にも1年生と6年生といった最低学年と最高学年の教室に入り、違いを認識することができた。「つい最近まで幼稚園児だった」というイメージの1年生、「来年から中学生」というイメージの6年生では極端だった。まず、1年生の場合は、私が教室に入ると喜んで椅子を持ってきてくれ、私がどこの席で給食を食べるのか取り合いになっていた。更に、食べる量が少ないため、児童が食べられない分はボランティア生にまわってくる。それに対して6年生は、私が教室に入ると礼儀正しく挨拶をし、担任の先生からの指示で私が給食を食べる席が決まり、児童が椅子を持ってきてくれた。体も大きくなり、食べる量も増え、自分が食べられない分は一度戻し、食べられる人が変わりに食べて連続完食を目指していた。会話をしながらも時間内に食べきらなければいけないことや、みんなで協力しながら完食することを重視しているように見えた。1年生は話し始めると話すことだけに夢中になってしまい、食べる手が止まってしまう。時間内に食べ終わらなくてはならないため、会話をしつつも食べることを促すように意識した。1年

生の給食の時間には担任の先生以外に、他の先生も一緒に教室で食べていた。

また、6年生の教室で給食を食べているときに、喧嘩をし始めた児童がいた。原因はポケモンのゲームに関しての意見が食い違い、そこから言い合いへと発展し、最終的にはお互いの言い方や態度に腹が立ったからだと聞いた。私たちの年齢からしてみれば「たかがポケモン」や「所詮ゲーム」と思うかもしれない。しかし、この喧嘩をしている児童にとってはすごい価値のもので、譲れない部分があったのだろう。「大人の視点」という上から目線で物事を捉えるだけでは、児童の気持ちなど理解できない、感じられないのだと分かった。自分がこの児童の立場だとしたら、自分がこのくらいの年齢のときはどうだったのかということを常に考え、「大人の視点」と「子どもの視点」から物事を捉えていくことが教師には必要だと思う。

更に、私は高校で教育実習を行ったため、高校生と小学生を比較することも出来た。明確な相違点は自分をアピールする強さだと感じた。小学生は自分の思っていることや分かったことを自ら話してくる。授業においても、みんな答えを言いたがり、積極的に挙手や発言をする。周囲の反応を意識することは少なく、表現力が豊かである。それに比べて高校生は、周囲の反応や評価を意識して消極的になってしまっている。しかし、自分を表現したいという気持ちは感じられるのだ。他者を意識するあまりに、自己表現をする方法が分からなくなっているだけだと私は思う。心と体は大人へと成長していく。しかし、その成長していく発達段階の中で、成長しているものもあれば、抑制をかけて退行してってしまうものもある。「成長」とは一体何なのだろうか。教師になるまでの期間を活用して自分なりに考えていきたい。

2. 授業外の活動の工夫

情報科学専攻 1年 刈部 真里

私は、前期に平塚市立土屋小学校へボランティアに行きました。6月に教育実習があったため、回数は多くありませんでしたが、授業のサポートをさせて頂き、子どもたちと一緒に給食を食べました。また、クラブ活動へ参加や、校務さんのお手伝いとして剪定などの作業も行いました。教育実習を除き、教育現場で子どもと触れ合える機会はこのボランティアしかないのです。とても楽しい時間を過ごさせて頂いたと思います。

その中で気になったのは、学年別の帰りの会の内容についてです。5年生の帰りの会を見学したときのことです。5年生では、帰りの会の時間に日直がその日一番頑張ったと思う人を言う時間が与えられています。その日、日直になった男の子がその時間で、「今日頑張ったと思う人は、5年1組のクラス全員です」と言いました。しかし先生は「クラス全員が頑張っているのは当たり前。その中でも頑張っている人を見つけるんだよ」と言っていました。日直の男の子は、しばらく考え込んでから、誰が、何を頑張っていたかを発表しました。誰にでも言える、ありきたりな言葉ではなく、自分の考えをしっかりと持つことを大切にしているのがわかります。また、1年生の帰りの会では、日直がその日何が一番楽しかったかを発表します。「生活が楽しかったです」と言う子もいれば、「国語が楽しかったです」と言う子もいて、それぞれがしっかりと意見を持って発表しているのが見えました。また、それだけではなく、その日に誰かが良いことや悪いことをしていたらそれを発表する、ということもしていました。悪いことをした、という報告を聞いたら「じゃあ、それを直そうね」と指導し、良いことをした報告を聞いたらしっかりと褒めます。これによって相手の良いところを見つけることが自然と出

来るし、かつ、悪いことは悪いと言える環境も作れる、とても良い取り組みであると思いました。

今回見れたのは2つの学年だけですが、この2つだけでも、帰りの会のような授業外の活動で工夫が見られていることがわかります。大学生である私たちにとっては、教師という仕事について授業をして教える部分に視点がいてしまいがちです。授業も勿論、教師の仕事として大切ですが、授業外での活動に目を向けるということも大切だろう、と今回の学校ボランティアで感じました。何故ならば、子どもにとっては授業の時間、休み時間、帰りの会の時間など、学校にいる時間全てが学習の時間だからです。それなのに授業時間以外の部分を教師が疎かにしてしまえば、その分子どもたちは学習する時間が減ってしまいます。なので、帰りの会の時間も自分なりの工夫をし、生徒に取り組みせ、普段の授業では教えられないことを教えていかなければいけないのだと思いました。

また、内容として、相手の良い部分、悪い部分を見つけ、伝えること、自分の気持ちを伝えること、というのは、現在問題となっているいじめを未然に防ぐためにも有効なものではないかと思います。相手の良い部分を見ることが出来るようになること、悪いことを悪いと言えるようになることは、とても大切なように思います。

今回の学校ボランティアでは、授業面という部分から少し目を離し、授業外の活動について目を向けることが出来ました。今回発見したことも、今後、自分に活かせれば良いと思います。何度行っても、この学校ボランティアでは新しい発見が出来る。今後も、学校ボランティアを通じて、何かを得られれば良いと思いました。

3. 積極的に関わることの大切さ

情報科学科 4年 酒井 翔平

ボランティア校 平塚市立土屋小学校

活動内容

・授業補助および参観

調理実習(5年生, 家庭科)

メダカの観察(5年生, 理科)

運動会の練習(6年生, 体育)

プール(5, 6年生, 体育)

組み木パズル(6年生, 図工)

七夕の飾りづくり(5年生, 図工)

歌唱練習(4, 5年生, 音楽)

・校務作業

運動会準備, 鍵の固定, トマトの苗植え

木の剪定, 草刈り

・運動会の補助

私が学校ボランティアを通して感じたことは、積極的に子どもたちと関わるのが大切だということです。私は昨年度から土屋小学校でボランティアをさせていただいているため、今年度のボランティアでは緊張や戸惑いなく始めることができました。しかし、昨年度は校務作業が中心で子どもたちと関わるのは給食のときと昼休みぐらいであり、1年生(現2年生)のところに行くのが主であったため、1年生とはたくさん関わることはできませんでしたが、なかなか全校児童と関わることはできませんでした。そのため、今年度ボランティアを始めた頃は2年生の子は私を見ると名前を呼んでくれたり、話しかけてくれたりしましたが、他の学年の子とは挨拶をしても返してもらえなかったりしたときもありました。このことで日頃の学校生活の中で関わっていくことにより、関係性が築けていけるのだと感じました。

今年度は火曜日と木曜日の週2日ボランティアに参加させていただきました。私の今年度のボランティアの目標は、”挨拶や会話を通して

たくさん子どもたちと関わる”ことでした。今年度も昨年度と同様に基本的には給食は1年生の子どもたちと食べますが、お昼休みには他学年の子どもたちとも話したり遊んだりするようにし、前年度よりも積極的に関わることでできました。すると、6月ぐらいからは、すれ違う多くの子どもたちが挨拶を返してくれたり、昼休みに遊ぼうと誘ってくれたりするようになりました。

今年度は授業の参観や補助といった形で実際の授業を経験する機会が多くなっており、さまざまな学年の子どもたちと勉強を通して関わることでできています。また、小学校教員を目指している私にとっては、先生方の指導の仕方や子どもたちの様子、教材の内容などを学ぶこともできています。

私は今年度中学校に3週間教育実習に行ってきましたが、3週間という短い期間の中で授業や学校生活を通して生徒と関係を築くのはとても大変であると感じました。それは、お互い初対面で緊張しており、話しかけにくいということにあると思いました。私はボランティアで学んだ積極的に関わることを心がけ、初日の給食時や休み時間など話しかけるようにしました。すると生徒のほうからも話しかけてくれるようになり、実習を重ねていくにつれてたくさんの生徒と関わるできるようになっていきました。

子どもたちから見ると、大学生や教師とは初対面から話したりすることは難しいと思います。子どもたちに対して私から積極的に挨拶をしたり話しかけたりと関わっていくことで、子どもたちの緊張が解けるのではないかと思います。これからはボランティアにおいて、子どもたちと積極的に関わっていくことができたと思います。

4. 変わった自分

情報科学科 3年 松井公拓朗

私は土屋小学校へボランティアに行きました。主な活動内容は、校務さんの指示に従って学校内や学校外での仕事を手伝うことでした。学校内の仕事内容は、使えなくなった機の解体や運動会のテントのセッティング、そして池の整備などです。池の整備は、池を新しくするというので、まず池から水を抜き、下に沈殿したヘドロを取り除きました。学校外での仕事は、台風後の通学路にある瓦礫の撤去をしました。また、校務さんとの活動のほかに、理科、数学、国語、道徳などの授業の様子を実際に見させてもらいました。その際に、丸つけや、困っている子どもへの対応を頼まれたり、理科の実験で、電圧計と電流計の使い方を子どもたちに指導する機会をもらいました。普段携わることのできない貴重な体験をさせてもらいました。

私は学校ボランティアを通して、校務という仕事にとっても興味を持ちました。なぜなら私が小学校、中学校そして高等学校と学校生活を送った日々の中で、校務さんは毎日学校で働いているにも関わらず、「どんな仕事をしているのか」、「自分の学校生活にどんな影響を及ぼしているのか」ということを考えたことがなかったということがあります。そして、今回の活動を通して校務さんから多くの事を学ぶと共に素晴らしいことを知りました。

学んだことの一つとして、実際に校務さんの仕事を体験し、話を聞き、校務という仕事の大変さを知りました。台風が去った後に子どもたちの通学路に瓦礫が散乱し、それを撤去するという仕事が与えられました。私は校務さんと共に撤去作業を行ったのですが、実際に作業にあたりと日の当たる中で力仕事は、思っていた以上に大変なことでした。校務さんは子どもたちが登校する前にある程度の瓦礫を撤去するため、6時から作業をしていると言っていました。

子どもたちの安全のために一生懸命に仕事をしている姿がとても格好良く見えました。また、日々の作業で、道具の使い方を教わりました。触ったことのない道具ばかりで、使うたびに大きな発見の連続でした。道具を使うのと使わないのでは、大幅に作業時間を短縮でき、改めて道具の便利さを学ぶことができました。

二つ目に、校務さんと活動する中で、校務さんの子どもに対する愛情が感じられました。機の解体作業のときに、道具を使ったのですが、子どもたちはとても道具に興味を持ちやすく、すぐに触りたがるということをしっかり把握した上で、休み時間はいったん作業を中断するということや、その場を離れる時は、子どもたちが見えない場所に道具を隠すといったような配慮を忘れずにしていました。また、草を刈る際に全部の草を刈ってしまったら、虫がいなくなり、子どもたちの遊ぶ場所がなくなるということで、フェンスに近い所は危ないから草を刈り、先生方が見える範囲の草は刈らずにとって置くことを心がけていると言っていました。自分だったら全部刈ってしまったらどうだろうと考えると子どもに申し訳なく思い、まだまだ配慮が足りないと反省しました。ここまで徹底して子どもへの配慮をしていることに対して尊敬すると共に、とても子どもへの愛情が感じられました。

自分が今まで小、中、高と学校で生活してきた、校務さんの事をいまいち知らなかったために感謝をして来ませんでした。しかし学校ボランティアを終えた今、とても感謝したいと思いました。日々、子どもの安全のために色々な工夫をし、学校中で作業をしている校務さんをととても尊敬する存在だと思いました。

二か月という短い期間でしたが、校務さんはもちろん、多くの先生方と一緒にになって活動できたことにとても感謝したいです。「仕事をしてあげている」ではなく、「子どもたちのためにしてあげたい」という前向きな姿勢は、多くのことに共通し、多くのことをプラスにして

くれるのではないかと思いました。自分もこれに習って、何事にも前向きな姿勢で取り組み、がんばっていこうと思います。

5. ボランティアから得られた経験

情報科学科 3年 松島 勇太

僕は5月から毎週水曜日の午前中に土屋小学校での学校ボランティアに参加しました。ボランティア活動の場所が実際の学校現場であり、教師を目指す僕にとっては大変貴重な経験を積むことが出来たと思います。実際に行った活動は様々です。算数や国語など授業の中で子どもたちが計算問題を解いたり漢字練習をしたりしているときに何か分からなくて手が止まっていたら声をかけて教えるなどのサポートをしました。理科の実験でのサポートもしました。さらに、プールでの監視員もしました。また、子どもたちとは離れ校務さんとの活動もしました。古くなった長机の処分、花壇に生えていた雑草の処理、台風の翌日のボランティアでは子どもたちが毎日通る通学路が台風の影響により木々で荒れてしまったので通学路の整備など様々です。また、運動会が近づいたときはテントを張りました。

様々な活動をした中でも特に印象に残っているのは2年生の算数の授業での「 $55-9$ 」や「 $24-7$ 」など、繰り下げのある引き算をやったときです。先生が一通りやり方について教えた後に各自演習の時間になりました。この時、子どもたちの様子をうかがいながら子どもたちの周りをまわっていて悩んでいたら声をかけて教えていました。ここでサラッと教えるなんて書きましたが、この繰り下げのある引き算を子どもたちに理解してもらうのにとっても苦労しました。一つ一つ手順を追って一緒にやると子どもたちも出来るのです。しかし、そのあと子どもたちだけで似た問題をチャレンジさ

せてみるとたちまち出来なくなるのです。だからもう一度、一緒に一つ一つ手順を追って一緒にやってみると問題なく出来ました。そして似た問題をチャレンジさせるとやっぱり出来ないのです。この時、「どうして出来ないのだ？」少しパニックになってしまいました。結局、その場で自分なりにいろいろ考えて、さっきとは異なる教え方で教えてみたりして、なんとか自分一人で解けるようになりました。子どもたちが一人で解けた瞬間はとても嬉しかったです。少し大げさですが「今、この瞬間にも成長したのだな。」なんて思いました。子どもたち自身も嬉しそうで僕が「良くできたね。すごいよ!」とほめると満面の笑みを浮かべていました。するとよりやる気を出して自分から進んで問題演習に取り組み始めました。このとき、「ほめる」というのも教える上での一つのテクニックなのかなと思いました。

後日、どうして子どもたちになかなか理解してもらえなかったのか考えてみました。僕たち大学生にとってこれくらいの引き算は出来て当たり前です。しかし小学生にとっては「繰り下げる」という概念は初めて出会うわけで全然当たり前ではないのです。もちろん小学生に対して「こんなの出来て当たり前だろ。」なんて態度で教えたわけではないのですがやはり心の奥底で「僕にとっては出来て当たり前だけど小学生にとっては当たり前ではないのだ。」という意識をしっかりと出来ていなかったから細かい部分での配慮に欠けたのではないかと思いました。

こういった出来事からたくさん的事を得ることが出来ました。教える立場で子どもたちに何かを教える時の意識、そしてほめることの大切さ。この学校ボランティアで得ることの出来た経験を活かせるように改めて「教師に絶対なるのだ!!」という思いが強くなりました。このような経験が出来るような環境を作っていた土屋小学校の先生方、神奈川大学の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。先生方の期

待に応えられるように日々、夢に向かって突き進んでいきたいと思います。

6. 印象や決めつけを持たず、常に新鮮な視点からみていくことの大切さ

情報科学科 3年 栗原 史帆

5月9日から7月18日までの9回（毎週水曜日11：00～13：10）と運動会（お昼～15：00）に平塚市立土屋小学校で学校ボランティアとして活動させていただきました。小学校では、クラスに入り授業の参観・お手伝いや、校務のお手伝い、運動会に向けた設備の準備、クラスの中で給食など様々な場面に参加させていただきました。

私が今回感じたことは、固定概念を持たずに常に新鮮な視点から生徒をみてあげることの大切さです。しかしもちろん、場に応じた視点で見てあげることももちろん大切です。今までは、その場に応じた視線の方が大切である。という方が自分の中に大きくあり、今回感じた固定概念を持たずに一定の視点からみてあげるということは意識もしていませんでした。

今回なぜ意識したのかということ、数時間一緒に過ごした中で、その時々生徒をみることができて、その数回の中である一瞬ではありますが、いつもと違う私が最初にどこかで決めつけていた印象とは全く異なる顔を見ることができたことです。

私は1年生の授業に3回ほど参加させていただきました。1回目、一緒に給食を食べた数回の時にあまり落ち着きがなく、自分のしたいことなどを授業中でもすぐに行動に移してしまふ。私がそんな印象を持った男の子がいました。もうすでに何度か給食を食べたことはありましたが、初めて授業に参加した回では、学級活動で、“クラス内で困っていること・クラスメイトにやめてもらいたいこと”などを話し合うというのが授業内容でした。私の予想通りにその

男の子はその時間にたくさん名前が挙げられて実質の注意を受けていました。もちろん誰も嘘をついている訳でもないですし、その男の子も注意を受けて、思い当たる節がたくさんあるのか、下を向いて手いじりなどをしていました。私もそういう子なんだ……とその時に思ってしまった、そのあとの授業でも“また話を聞いてない……”というような目でその子のことをみてしまいました。

しかし、3回目の2時間続きの“図工”の授業でその子の顔を見て驚きました。すぐく集中して、おしゃべりもいたずらも、自席を立つこともせずに、しっかりと座って自分の作りたいものをスケッチする作業を行っていました。2時間目の図工になり、先ほどのスケッチとは全く別の床での作業になりました。床で15センチぐらいの棒（数え棒？）とペットボトルのキャップなどを使って自分で自由に作るというものでした。たとえば、ピカチュウを作りたい子は黄色の棒で輪郭を作り、その中に黄色のキャップを敷き詰めて表現したり、棒を並べて家の形を表現したりと比較的に動き回ることのできる授業内容だと思いましたが、その子は自分の作品を作っている範囲から全く動かず、黙々と自分の作品である迷路を作っていました。何度かは友達に見せ合ったりしていましたが、それも何度かであって全く授業には問題のない程度でむしろ他の人の意見も取り入れるなどの模範的だったと感じました。私はすごいなあ。と思う反面、勝手に不真面目であるという印象を持って接していたことにとても申し訳なさを感じました。

毎回100%新鮮な視点というのはもちろんできないと思いますし、前回からどういった成長があったかなどを知るときにはもちろん過去が必要になります。ですが、過去に印象を持ちすぎて、それで新しい印象に気づかずにいてしまうことはとても怖いと感じました。そして今回はとても申し訳なかったです。今回は、悪い印象から好印象でしたが、逆の場合もあると思い

ます。どちらにせよ気付かずにいたら生徒の信頼を得ることはないし、無くしてしまう可能性が大いに考えられる出来事だったことから、この点が大切であると感じました。

7. 子どもと一緒に成長できた自分

情報科学科 3年 中島嵯恵子

私は土屋小学校に小学校ボランティアとして参加させてもらいました。活動は授業の補佐や校務さんのお手伝い、前期だったので運動会のお手伝いもさせてもらいました。授業の補佐では道具の配付や授業で分からないところの説明、子どもへの手助けなど様々なことをさせてもらいました。後ろから授業風景を見ていることや先生の授業を生徒としてではなく教員志望という立場になって見ていることは私にはとても刺激的でしたし、多くのことを学びました。

改めて教師という職業の大変さを感じました。そして校務さんのお手伝いは力仕事だったり子どもへの配慮、やることはたくさんありました。自分が小学生のときにも、もちろん校務さんはいましたがその職業は謎で、裏でこんなにもサポートしていたのかと学ぶことは多かったです。台風の次の日には通学路に倒れた木や枝を取り除く作業、夏の暑さ対策のために作ったゴーヤカーテン、使えなくなった机の解体作業などたくさん体験させていただきました。草の除草時には刃の付いた草刈り機ではなく、ビニール製の紐を使用したり、子どものいない時間帯をねらって行うなど子どもへの配慮が見られました。実際に自分がのこぎりを持って作業をしていると小学生は興味をもって寄ってきたり、道具に触ったりと危ない状況になりうると感じました。運動会ではテント張り等の準備から当日、片付けまでお手伝いさせてもらいました。当日には各種目の時間を計り、遅れているかの確認や去年の記録との比較をしたり、競技

中に流れている音の設定やアナウンス、盆踊りや数合わせに綱引きにも参加させてもらいました。大変なこともありましたが先生方や子どもたちの協力もあって、私自身楽しんで運動会に参加することができました。と同時に子どもたちの成長や頑張りにとっても感動しました。最後の後片付けには保護者の方の協力もあってスムーズに進みましたし、運動会の一連の流れに参加できたことはとても貴重な体験でした。

初めての小学校ボランティアだったので最初は緊張しましたし、子どもの対応に戸惑いもありました。ですが週に1回のボランティアを重ねて新しい発見、自身への課題を見つけ、今は成長できた自分を実感しています。授業の補佐では2年生の引き算の筆算が一番印象的でした。筆算の考え方から、書き方を学ぶ授業でした。道具を配ったり分からない子どもには丁寧に説明するのですが、中には、分からないと自分から言ってくれる子は少ないです。手が止まっていたり違うことをして遊んでいる子、中には簡単だと言ってあっという間に終わらせている子もいました。教え方も様々でその子に合った説明があり、一人一人の個性を感じました。給食を食べる時には子どもが自ら進んで席を作ってくれたり、大学生が来ることをとても喜んでくれます。初対面の私とも無邪気にいろいろと話しかけてくれました。神奈川大学の先輩方たちが築きあげた小学生の子たちとの信頼関係を感じ、自分もそういう関係を作っていけたらいいなと思いました。

子どもたちの行動やささいな発言にも、とても考えさせられるものがありました。大人にとっては当然のことも、子どもたちからしてみれば新鮮な発見ばかりで、その捉え方はばらばらでした。中には私には考えられないアイディアだったり、なるほどと感心することもあり私自身驚きました。

子どもの目線になって考えることは私が長い間忘れていたことで、思い出すとともに気づかされることも多かったです。相手の立場になっ

て考えることは小学生に限らず、どのような場面でもいえることで、教師になる上で必要不可欠なことだと実感しました。

運動会当日には組み体操やダンスを成功させている姿を見て子どもの成長を間近で感じることができました。先生方の真剣な顔が満面の笑みに変わっているところが、印象的でした。

私は大学生でまだまだ至らない部分も多いですが、子どもたちにとっては両親、学校の先生に続く、身近な大人の一人です。だからこそ皆のお手本となれるような行動を心がけています。小学校ボランティアを通して今までは知らなかった“先生”という職業をより深く知ることができました。そして、ますます先生になりたい気持ちが強くなりました。

8. 立場が変わって気付いたこと

化学科 3年 栗林 安幸

土屋小学校へ学校ボランティアに行きました。12:30～15:30に行きボランティアの具体的な内容は、小学校の児童と一緒に給食を食べた後、掃除の手伝い初日は校務作業のオリエンテーション、校務作業はどんなことをやるのかを教えてもらった。次の週から本格的な校務作業が始まった。具体的には、学校の敷地内にある木の手入れ、使わなくなったオルガンや机などの分解、プランターに土を入れ、花壇の整備や花の植え替え、児童が授業で使う通学路の掃除、畑を耕しておくなどの作業をした。小学校の授業の手伝いでは、体育の授業で運動会の練習の手伝いをした。また、授業の手伝いでは、6年生の算数の授業での採点や机間指導を行った。5年生のパソコンの授業では、主に机間指導を行った。また、児童たちとの交流では、給食での交流が多く、他には、掃除やお昼休みなどでも交流する機会があり、自ら積極的に交流することができた。

私が小学生の頃は、校務作業をする人の存在は知っていたが、具体的にどんな活動をするのかまでは知らなかった。今回の土屋小学校での学校ボランティア活動を通して、校務作業の活動内容を詳しく知ることができた。

初日に、校務作業のオリエンテーションということで具体的にどんな作業をしているのかを教えてもらった。その作業内容とは、上記の校務作業の活動の他に、図書館から依頼された本棚の制作や、学校の敷地内の草刈りなど、小学校での様々な問題を解決していることを知った。また、ただ作業するわけではない。そこには校務員さんの工夫があった。学校の敷地内の木の手入れでは、児童達の安全を第一に考え、木に蜂の巣ができると危ないので、巣ができないように木の枝を切っていて、さらに見栄えが悪くならないように人に見られる部分ではなく見えない部分を切っていたなどの工夫があった。その他に、花を植えるプランターに入れるために、土と腐葉土を混ぜるとき均等に混ぜる工夫や、畑を耕すために二人でスコップを使い効率よく畑を耕すなど様々な工夫を教わった。草刈りなどをする時に使う草刈り機や他の機械類を扱う時は、児童が周りにいると危ないので児童が居ない時間帯などに作業するなどのような工夫をしていて、私が小学生の頃は特に気にせず通っていた学校には、私たちの知らないことで私たちが安全に学校生活を送れるように配慮していることを知ることができた。

児童たちとの交流し、感じたことは20人以上いる児童を一人で見ることは大変だと感じた。また、積極的に話しかけてくれる児童もいれば、なかなか話しかけてくれない児童もいるのでそういう子には自ら進んで話かけよう心がけて交流をした。

6年生での算数の授業では、分数の計算の授業で机間巡視や問題の採点のときなどで児童がわからない時のアドバイスの仕方がわからなかったが、先生のやり方を参考にでき、いい経験になった。5年生のパソコンの授業では、6

年生の授業での経験生かし、質問があったとき児童に考えさせながら答えに導くようなアドバイスをすることができた。パソコンを前に児童がそれで遊んでしまい、先生の説明を聞かなくなってしまう、そんな時の児童の注目を集める方法などとても参考になる部分があった。

これらの経験は、将来の教育実習で質問されたときのアドバイスなどで役に立つと思うのでとてもいい経験になった。

いろんな児童をよく観察し、どこの問題で躓くのか、どこがわからないのかをあらかじめ把握し、授業に臨んでいると感じた。また、これらの経験を生かし教育実習に臨みたい。

9. 見えない配慮の大切さ

化学科 3年 蓼沼 礼敬

私は春から、土屋小学校で学校ボランティア活動をさせていただいています。理科や算数の授業にアシスタントとして参加させていただいたり、はたまた保健室の先生のサポートとして検診の手伝いをさせていただいたり、訪問するたびに実に様々な活動を体験させていただいています。私はもともと、地域の小学生を対象とした学習支援ボランティアにも参加しているので、児童たちと話すことや彼らに勉強を教えることにはほとんど抵抗がありませんでした。そのため、初めて訪問した日から児童とたくさん話すこともできて、「今日はどんな活動をさせていただけるだろう。」と訪問するのが毎週とても楽しみでした。

しかし実際は、給食は毎回児童たちと一緒に食べられるものの、清掃・昼休みをはさんだ後は校務作業の手伝いをさせていただくことが大概でした。初回からしばらくはそれが続いたため、「今日も校務作業かな？」とさえ思うほどでした。一概に校務作業と言ってもかなり様々な作業があり、植木の刈り込みをすることもあ

れば、使い終わった椅子やオルガンの解体作業などもやりました。

校務作業をしていると児童たちと触れ合う機会が減ってしまうので、それが非常に残念に思う時期もありました。ですが、校務作業を通して学ばせていただいたことも数多くありました。草刈りでは刃物を使用するから、児童がそばで遊んでいたり下校で近くを通ったりする時には必ず手を止める。椅子やオルガンの解体は、解体後にネジや木片など、誤って児童がケガをしてしまうような物が落ちていないか、片付けまで用心する。探せば探すほど、毎回の作業の中に児童への配慮が見られたのです。6月の運動会を間近に控えた日の植木の刈り込み作業では、懸命に練習している児童の邪魔にならないように、普段より静かに、かつ彼らの視界にできるだけ入らないように作業をしていました。台風の翌日は通学路や学校の周辺の道が荒れているので、普段よりも早く登校し、誰よりも先に通学路の倒木の撤去をした、という話もお聞きした時には、児童の安全を念頭に置いていることがしみじみと伝わってきました。

もちろん児童から離れた場所での間接的な作業ばかりではなく、サツマイモを植えるためのうね作りのような、授業の準備にあたる作業も体験させていただきました。私たちがうねを作って間もなく、児童たちが早速そこを使っている様子を目にした時にはとても嬉しく、校務作業のやりがいを実感しました。

児童との関わりを通して学べることが多い印象が強かったのですが、それ以外の場面でも学べること・気付かされることはたくさんありました。授業に参加させていただくことはもちろん、今では校務作業を手伝わせていただくことも楽しみのひとつになっています。どんなところにでも学べる要素が落ちている、それを肝に銘じてこれからの活動をより有意義なものにできるように努めたいです。

10. 児童の社会力・自立心をどう育成するか

化学科 3年 宮下愛梨彩

私は土屋小学校で週に一回、計10回のボランティアに参加させていただきました。その活動内容は、公務作業から授業の補助まで様々なことを経験させていただきました。公務作業では、蔦切りや落ち葉掃除、プール掃除など慣れない作業が多かったです。また、授業の補助では、算数や図工などの様々な教科の補助をさせてもらいました。学年の異なる児童と接することのできる時間をもつことができ、とても貴重な経験を積むことが出来ました。

普段の生活では、小学生と接することがないので、初めはどう接すればよいのか戸惑いました。しかし、先生方のサポートもあり、素直で明るい児童たちにすぐに馴染めるようになりました。土屋小学校は、各学年一学級20人前後の児童編成となっています。クラス替えがないからか、土屋小学校の児童同士が互いに分かり合っている印象を受けました。先生方から見ても、人数が少ない分、一人ひとりの児童をしっかり見ることができて良い環境が作りやすくなると言っていました。私も少ない時間のなかで、一人でも多くの児童と接することができるように心がけていました。学年が上がるごとに、児童の個性はより輝きが増しているように思いました。児童の個性を一人ひとり、理解するためには相手の話を聞くことが大切だと思いました。先生方は集団生活の規則を守りながらも、児童の意見をしっかり聞き、適切な指導を行っていました。

土屋小学校に行かせていただいて一番強く感じたことは、児童全員の礼儀がしっかりしていることです。基本的な「ありがとうございます」や「お願いします」などはもちろん、話を聞く姿勢まで、礼儀が身についているように感じました。先生方の指導が適切であり、それを6年

間続けることで、より身に付くようになるのだと思いました。私が、児童が解ききったプリントの丸付けをしているときに、しっかりと立って待っていない児童に対して先生は厳しく指導しました。私が気に留めないところまで、先生方は注目しているのだと思いました。

教師は常に人の上にたち、目標になるべき存在でなければならないと、改めて感じました。人を指導するには、まず自分が細かい礼儀まで身につけるべきだと考えさせられました。また、教師は人に注意することが多いと思います。小学校の教員は、さらに多いと思います。クラスにつくことで、先生が注意する場面を何度も見てきました。学年により、その注意の仕方も様々でしたが、共通していることは、その後どうするべきか児童自身に考えさせるということです。いけない事をしたら、どうするのが良いのか自分で答えを見つけられるように指導していることが、児童の自立心を確立し、社会で生きていく力の形成に繋がるのだと思いました。ただ、怒るだけならとても簡単なことだと思います。ですが、ただ怒るだけでは何の解決にもなりません。怒ることと指導は全く異なるものだと感じました。

私は、ボランティアの初めは、こうしたほうが良い、などの正解を教えてしまうような指導をしていましたが、それではいけないのだと思います。その後児童に考えさせるように指導を行いました。児童に考えさせるようにしてから、私は児童に接することが、より楽しめるようになりました。児童も進んで自分から行動するようになつたと思いました。このように自分で考えさせることは、勉強に通じるものだと思います。児童が分からないと悩んでいたなら、答えを教えてしまえば簡単ですが、それでは何も進歩していません。児童自身が考えなければいけません。私がすべきことは、答えを導くためのヒントを与えることです。小学校の先生方を、子どものころとは違う見かたをすることで、学ばべきところを知ることができました。

また、自分に足りないところを確認出来ました。教師になるために、自分を再確認できる機会をいただくことができ、深く感謝しています。

1.1. 子どもの目線に立つ

化学科 3年 柿澤 拓也

私は5月から7月の木曜日の午前中に土屋小学校で、小泉さんと一緒に校務作業をしたり、子どもたちと一緒に過ごしました。1年生とは生き物を捕まえたり、3年生とは歯科衛生士さんのお話を一緒に聞いたり、4年生とは算数で少し躓いている子に対して考え方を教えてあげたりしました。5・6年生とは運動会の練習で、主に組体操と騎馬戦の練習をして、プール開きをしてからは一緒に入ったわけではないですが、プールの授業に参加させていただきました。

子どもにとって先生というのは、子ども自身と比べるととても大人で、大きい存在であると、自分が小学生の時は思っていたし、土屋小学校の子どもたちも同じように感じているように見えました。しかし、今回の土屋小学校のボランティアを通じて、教師は子どもが思っている以上に生徒目線で接していて、どのようにしたら日々の学びの中に子どもが夢中になれる環境を作り出せるかを常に考えているように感じました。特に6年生を担当していた先生が子どもと接する際、子どもたちを楽しませながら授業を行っていて、子どものことをよく見ていて、理解しているように感じました。例えば、プールの授業では、子どもたちを水に慣らさなくてはいけないのですが、ただプールに入る前に自分の体に水をかけて、と言うだけでは、めんどくさがってやらない子もいると思うのですが、その先生は、生徒同士で水のかけ合いをさせることによってプールの水に慣れさせることはもちろん、子どもも必死になって隣の人に水をかけていて、最終的にはみんなびしょびしょにな

るほどになっていました。全体的にとっても雰囲気作りのうまい先生で、授業であっても大抵子どもの間には楽しそうな笑い声が絶えることはありませんでした。

このような子どもの気持ちを優先して指導を行う工夫は小学校特有のものであり、教えるのが小学生だから勉学に対する興味を失わせないためにも学びの中に面白さを織り交ぜているのであって、勉強をするという意識が比較的高くなる中学・高等学校の免許取得を考えている人にとっては、ボランティアに行っても学べることは少ないのではないかと最初は思っていました。しかし、新しいことに興味を湧かせることや、子どものまとめ方については小学校に限らず、中学・高等学校でも生かせるのになるのではないかと思いますし、私が気づいていないだけで、小学校のボランティアを行うことで学べることはまだまだあると思います。なにより、このボランティアで生徒に対する接し方というのが教師側の視点で見ることができるとというのが最大の利点だと思います。

いきなり、教育実習等で教壇に立つより、このボランティアを通して子ども側ではなく、教師側の立場に立って学校に行くことで教育実習の前準備ではないですが、事前に学校の空気に慣れるという効果があるのではないのでしょうか。

もちろん、小学校ならではの工夫も学べて、小泉さんとの校務作業で植木一つをとっても外観だけを整えてあり、毛虫や蜂の巣ができたらすぐ発見できるように内側だけはくりぬかれていたり、子どもに危険がない配慮された環境づくりという中学・高等学校では見られない特徴も学べました。

最初は、特に関心もなく、教員採用試験の面接のときに何もないよりはボランティアを経験しましたと言えたほうがいいかなという程度に考えていましたが、やっているうちにどんどん気持ちも変わってきて、どうしたら子どもたちと打ち解けられるのか、子どもに好かれるには

どうしたらいいのかを手探りながら考えていました。本来ならば、先生が子どもに対してどんなことをしていて、吸収できるものを探すべきなのですが、ほとんど気にならないと言っては変ですが、純粋に子どもと楽しく過ごせました。成果があったのかは疑問ですし、教師側の立場に立って学校に行くというのにはまだまだ難しいように感じましたが、大学生活にはない楽しみが毎週体験できたので良かったです。

12. 児童と接すること

化学科 3年 上條 順絵

私は土屋小学校へ5月10日から7月19日まで毎週木曜日に学校ボランティアへ行った。主な活動内容は、校務の手伝いと、授業補助の二つであった。校務の手伝いでは、草木の刈り込み、花壇や植木鉢への花の植え付け、通学路の落ち葉掃き、プール掃除、池の掃除などの手伝いを行った。授業の補助では、見学した授業も含め、ほとんどの学年の授業補助をさせてもらった。私が見学させてもらったクラスは、1, 2年生が多く、校外学習の付き添い、算数や生活、体育の授業の補助に参加させてもらった。また、高学年の児童とは接する機会が少なかったのだが、4年生では理科の授業の見学、5, 6年生では体育の授業の見学をさせてもらった。また、幼稚園のプールの補助などの普段体験できないような体験もさせてもらった。

今回の学校ボランティアを通して、児童の目線で考えることや児童への接し方を勉強することが出来たと思う。校務の仕事では、児童たちが隠れてしまいそうな所で木が生い茂っているところは、危なくないように切ること、木の切り方にも前から見て綺麗に見えるように切ること、蜂の巣や毛虫が駆除しやすいように切ることなど、一つのことだけでもたくさんの工夫が見られ、私たちが児童だった頃には気づか

なかった配慮がたくさんあることが分かった。プール掃除や落ち葉はきなどでも、児童も一緒に行うけれど、それ以前にある程度まで片づけられていたりして、自分が知らなかったところでもたくさんの仕事があるということを実感した。また、草を刈る時などにも、児童がいる時間帯は危ないからと早めに学校にきて行うという話を聞き、今まで校務という仕事には直接かわったことがなかったけれど、学校の花壇が手入れされていることや庭が綺麗なのもすべて私たちが見えなかったところで行われていたことだとわかった。教えるということだけではない先生の学校や児童へ対する配慮はたくさんあることを校務の手伝いを通して実感することができた。

授業の補助では、児童一人ひとりへの気遣いはとても大変だということがわかった。特に、一年生の授業では、私たちは当たり前と考えてしまうことを教えたりするので、児童一人ひとりが理解しているか見ながら授業を行うことはとても大変そうだった。授業の補助でも児童にわからないと聞かれたことをどこまで教えていいのか分からなく、難しいことも多かったけれど、何回か授業に参加させてもらい、児童に考えさせていくことが重要だということがわかった。校外学習でも、児童の体調管理や交通安全など配慮しなくてはならない点が本当に多く、一人の先生がクラスの児童全員に注意を向けていくことはとても難しいと思った。生活の授業などでは、児童の目線から新しい発見をすることが多く、自分が気付かないようなことに気づくので、たくさんの児童の話を聞き、児童の目線で一緒に考えていくことの大切さを知ることが出来た。また、授業に関することだけではなく、学校生活において、叱るということは大変なことだけれど、とても重要なことであると思った。私自身、他人に対して直接叱った経験もあまりなくボランティアという立場もあって、児童に注意することはできたけれどゆるい感じになってしまった。低学年の子は特に元気

がよく、注意だけでは聞かない子もいて、そのようなときには厳しく注意し、ダメなことはダメとはっきり叱ることが必要だということが勉強出来た。実際にどの程度で怒ればいいのかとか加減がまだわからないので勉強していきたいと思った。

先生という目線から児童を見て、私は児童への接し方の重要さを改めて実感出来た。あたり前のことであるが、実際にはとても難しく、大変であった。しかし、児童と向き合うことの基礎だと思うので、今後のボランティア活動や教育実習の課題として取り組みたいと思う。

1.3. 改めて小学生の指導を感じて

化学科 3年 小嶋 啓喬

私は今回土屋小学校にボランティアにきました。午後の部でボランティアに参加させていただき、主な活動内容としては、低学年の子どもたちと給食を食べて、その後校務を手伝ったり、2,3,4年生の授業の補助をやらせてもらいました。

具体的には校務では通学路の整備をしたり、花壇に花を移したり、子どもたちが学校生活を安全に、より学習に励めるように学校環境を整えました。授業面では算数の丸付けや漢字の書き順などの練習、演奏発表の練習などを手伝い、子どもたちの学習の補助をしました。

約3ヶ月弱の学校ボランティアでしたが、この学校ボランティアを通して得た学校のイメージと、私が経験してきたイメージは少し違うものでした。

その中でも、特に驚いたのが学校での生活環境を支えている校務の仕事が想像以上に子どもたちのことを考えて行なっていたことです。単に学校の整備をするだけでなく、ハチが巣をつくらないように木を切ったり、草刈など危ない作業は子どもたちの登校前に行うなど子どもた

ちの安全をものすごく気遣っており、また子どもたちも作業を手伝えるようにと椅子などを磨く場合には安全でかつ普段から見慣れていて遊び出すことを防ぐことができるハブラシをつかうなど幼さのこともいろいろと考えられて行われていました。

今までは校務は学校の教育においての裏方的な存在だと思っていたのですが、子どもたちの指導および教育の構成には欠かせないものだと思います。

また、校務さんにも転勤が3,4年に1度あることを知りました。転勤などは特定の学校に居続けないことで均一化を図っているそうです。

校務さんは先生方にも子どもたちにも頼られ主に学校の整備を任されており、学校のなんでも屋さんのようでした。

小学校の授業などで一番印象に残ったことはどの学年もわりと厳しい言い方、指導方針だなということです。正直私が小学生だった時のことはあまり覚えていないのですが、そこまで厳しくはなかったと思います。ですが、何回かボランティアを体験していくうちにこの厳しさが必要なのではないかと思いました。小学生は中学に進学する一歩前であり、学ぶことを学んでいく重要な段階にあると思います。その小学校から、規律を守ることや自分で考えて行動すること、意見をまとめることなどなど、これができるようにするというのは難しいかもしれないけれども、そういう環境に馴染ませていくことはいいことだと思えるし、小学校からでも早くないと思えました。

授業では小学校2年生に算数を教えてたときに「 $9-8=1$ 」がわからないと言われ、自分では当たり前なことを教えることの難しさを改めて実感しました。他にも漢字の書き方などで書き順の見本があってもその通りにかけない子がクラスでも半分くらいいることにも驚きました。子どもたちの知能の成長なども私が考えているよりも個人差があり、出来るだろうという

思い込みはいけないと気づきました。一人ひとり、また学年によってその子の学べるスピードを考えてあげ、その上で学習をサポートしていくことの必要性を再確認することができました。

今回のボランティアだけでは判断しかねることは小学生のメンタル面です。小学生全学年を通して喧嘩が多いのが目立ちました。そのときどこまで入り込んでいいのか、どのように解決へ導くかなど繊細な部分について少し理解が及ばなかったかなと思いました。

14. 自分らしくあることの大切さ

化学科3年 笹島 瑛梨

学校名：土屋小学校

活動内容：校務さんのお手伝い、プール清掃、
授業の補助（主に低学年～中学年）、
教室で児童と一緒に給食をとる等

私は中学校の教師を目指しています。中学校に上がる前の小学校での教育にも興味があり、今回土屋小学校にて学校ボランティアに参加させていただきました。始めはきちんとお手伝いができるだろうか、逆に迷惑になってしまわないだろうか…などと頭の中は不安や恐怖でいっぱいでした。私は根が真面目で、柔軟に物事を考えるのは苦手な方だと思います。そのため、教員を目指す立場なら、此方からたくさん話しかけて、絶対仲良くならなくてはいけないんだ！と気負ってしまっていました。

自分では笑顔で積極的に活動していたつもりでしたが、そんな状態で子どもたちから親近感や信頼感などを得られる訳もなく、一方的に働きかけるばかりで、疎外感を感じることもありました。今改めて考えると、こうでなくちゃいけない！と身構えてしまったせいで、自然と子どもたちとの距離ができてしまっていたのだと思います。しかし、回数を重ねていくことで雰

囲気にも慣れていき、名前と顔が一致する子も増え、逆に私のことを覚えていてくれる子どももいたりして、学校をとっても身近なものに感じることができるようになりました。話しかけてきてくれる子がいると、とても嬉しかったし、等身大の自分で向き合うことができました。おっちょこちょいな面もある私ですが、それも含めて受け入れてくれる子どもたちの笑顔に何度も救われました。教育に携わる方々も、こうやって子どもに支えられている部分もあるのだろうなあと、身を持って考えさせられました。

また、授業の補助等で先生方や子どもたちが自分を必要としてくれることで、役に立っている充実感がありました。そして、様々な子どもと接していく中で、良くも悪くもお手本として子どもの目に映る自分は、どのように振る舞うべきであるか、自分のあり方を考えることも多くなりました。優しいだけではなく、時には厳しく接することも必要であり、特に低学年の場合、「しつけ」という面での指導も多いと思います。また、どこまで手伝い、どこから自分でやらせるのか、ボランティアという立場だったことも加えて、判断がとても難しかったですが、それは教師になれたとしても日々考えていくことなのだと思います。

教科指導だけではなく児童指導も行うという点で、教師は大変だと思っていましたが、それは大学の講義の中での話であり、実際に学校の雰囲気を経験できたことで、教育の現場では何が必要とされるかを勉強させていただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。ボランティアに参加させていただいたことで自分に少し自信を持つことができ、このような機会を与えてくださった土屋小学校の皆様や神奈川大学の関係者の方々に、大変感謝いたしております。子ども一人ひとりにも個性があるように、私たちボランティアをする側の大人にも個性はあり、無理に型に当てはめる必要はないことがわかり、自分らしくあることの大切さを痛感しました。この経験を通して、改めて将来教育に

携わっていきいたいなあと思いました。

15. 今になって見えたこと

化学科 3年 柴崎 潤平

私は今期、5月から7月にかけての3ヶ月間、神奈川大学の隣にある土屋小学校にボランティアとして通わせていただきました。毎週水曜日、12:30から15:30まで、給食を食べるところから参加しました。主な活動内容としては、授業補助、校務さんの手伝いとしての校務作業や学校行事の手伝いなどがありました。他にも掃除の手伝いをしたり、昼休みに小学生とグラウンドでサッカーや缶けり、鬼ごっこをして遊んだり、学童で放課後まで残った子どもたちと一緒に遊んだりしました。

私はこの小学校ボランティア活動を通して、とても沢山の事を学びました。ボランティアに行く前にはあまり明確に覚えていなかったこと、忘れてしまっていたこと、自分が小学生だったときはどうだったのかを思い出しました。

小学生にうまく溶け込めるか、先生たちは良い人たちだろうかなど、不安も少しはありました。でも実際に行ってみると、子どもたちはみんな元気に話しかけてくれ、先生も楽しい人たちで、すごく恵まれた環境だと思いました。

5月の活動は主に校務作業でした。学校の敷地内にある木や花壇の手入れや、柵に絡まっていた蔓の除去、いらなくなった机や椅子、オルガンを解体して廃棄をしました。初めて使う電気ドリルや2人1組でスコップを使う作業も面白く、校務さんがとても話しやすい人だったので、毎週楽しく作業をすることができました。今まで学校に通っていて気にもしなかった事でしたが、校務作業の大切さを知りました。

6月に入ると実際に授業に入って、先生の補助をやらせてもらうことができました。最初に5年生の社会の授業に入りました。後ろの席

でふざけている子を注意したり、分からないところがある子に教えてあげたりしました。小学校の授業を改めて受けてみると、当時気付かなかった事が数多く見つかりました。先生が子どもたちをうまく授業に参加させ、常に生徒の興味を引き続けつつ、楽しい授業となっていました。私も来年教育実習に行くので、とても参考になりました。

7月になると、書写の授業や家庭科の授業にも参加させてもらいました。どの授業もみんな積極的に取り組んでいて楽しそうでした。家庭科の授業は担任の先生がいなかったのも、自習という形で行いました。授業の最初は代理の先生もまだ来られなかったのも、ボランティアの大学生2人で担当をしました。実際に教壇に立って号令を受け、子どもたちに指示をしたのも、本物の先生になったような気持ちになりました。このような貴重な体験ができてうれしかったです。

また、土屋小学校は人数も少ないせいか、学年を越えて皆仲良しでした。掃除も縦割り班で行い、上級生がまとめていました。昼休みや放課後も学年関係なくみんなで遊んでいて、すばらしい学校だと思いました。

小学校ボランティアを通して本当に沢山の事を学ばせて頂きました。3ヶ月と短い期間でしたが、自分が小学生の時には知らなかった校務作業や授業構成など、とても為になりました。本当に行ってよかったです。この経験を来年の教育実習に活かしていきたいです。

16. 学校っておもしろい

化学科 3年 続橋 直弥

自分は、土屋小学校に行きました。お昼頃からやらせてもらっていたので、1日のスケジュールは、給食を食べて、掃除をして、5時間目は授業が校務さんの作業を、6時間目クラ

ブ活動を一緒に体験させてもらいました。

土屋小学校は1学年1クラスの小さな学校でした。だからなのかもしれませんが、給食の時や掃除の時など、いつも上級生が下級生のところへ手伝いに来て面倒を見ていました。そんな中、下級生は好き勝手遊んでいたり、そうかと思えば、甘えてみたり、兄弟みたいでほほえましかったです。人数が少ないのでみんなお互いによく知っているようです。学校の雰囲気としては、アットホームでした。素直でよく働く子が多かったと思います。

初めて行ったときから、子どもたちや先生方に温かく受け入れてえもらえたので、楽しく活動することができました。回数を重ねるごとに顔と名前を覚えてもらえて、自ら集まってきてくれたり、挨拶してもらえたりしました。「明日は来る」と聞かれて、「明日は来ないな」というとすごく残念そうな顔をしてくれました。とてもうれしかったです。また、給食を食べに教室に行くと「こっちこっち」と呼んでくれたのですが、何人かの子がもめていたので少し複雑でした。今の低学年の子は、「いただきます」の後まず、給食の量を減らしに行きます。自分たちがそれくらいの時は、取り合って食べていたのでこれには驚きました。でも、好き嫌いはないようで、食べられる量をきちんと食べている様子が印象的でした。また、家が遠かったり、学校がクラブなどで遅くなったりして帰ってから友達同士で遊ぶという子が少なかったのには不思議でしたが、もっと驚いたのは、学校が終わってからの予定に宿題とか通信教育などの“勉強”や習い事の時間が含まれている事です。

高学年の子とはクラブ活動等で関わることができました。面倒見がよく、自分たちで試合を企画できるほど、しっかりしているようにも見えましたが、かわいらしい一面もありました。なかなか消極的な子でもスポーツと一緒にすることで打ち解けることができたと思います。20分くらいでしたが、一人でクラブを見る機

会がありました。一緒に走ったり、教えたり、まとめたり、部活の顧問気分を味わえました。面白かったです。そんな中に野球をやっている子が4・5人いました。自分が野球部だったことを知っていたらしく「教えて」と来てくれたので、簡単に教えました。すると次の週の帰る時、門のところでその子たちが「教えて」とまた来てくれました。これは一番うれしかったです。

校務さんの仕事は簡単にいうと、学校の整備ですが、かなり大変です。敷地内の草刈り、校舎やグラウンドの整備、電気や配管の工事…など全部一人で行います。校務さんがいるから、安全で楽しい学校が成り立っていることを初めて知りました。さらに、この校務さんは、畑仕事もやっています。この畑で子どもたちが虫を捕りに来たり、野菜を収穫して食べたりしていました。小学校でそういうことを経験できる環境はすごくいいと思います。

今期5回しか小学校に行けませんでした、非常にいい経験をさせてもらえました。楽しいことしかしてませんが、先生になりたいと思いました。ありがとうございました。

17. 発見と課題

～初めての学校ボランティア～

総合理学プログラム 2年 中山 直之

私が今回学校ボランティアとして訪れた学校は、平塚市立土屋小学校という学校でした。豊かな自然に囲まれたその学校で私は子どもたちと給食を摂ったり、授業の手伝いをしたり、また、時には校務さんたちと一緒に学校内の清掃などの様々な雑務を行ったりと、いろいろな活動をしてきました。以下にその報告を行います。

私は基本的に他の人とコミュニケーションをとることがとても苦手で、日頃から人との接し方がわからないところが多かったため、小学校へボランティアに行くと決めたときも、自分の

存在が子どもたちにとって不安や不快の対象と
ならないだろうか？自分の存在が子どもたちに
威圧感を与えないだろうか？という不安が自分
の中で大きな位置を占めていました。しかし、
実際に小学校にいてみると、たくさんの子ど
もたちが私に話しかけてくれて、びっくりした
のと同時にとても嬉しかったです。

私が感じた土屋小学校の子どもたちの印象は
みんなとても元気が良いのと、それとは対照的
に上級生はちゃんと下級生の面倒を見ていた
り、場に落ち着きがないときには全体に対して
静粛をうながす子どもたちが複数いたり、全
体的に子どもたちの秩序に対する意識がかなり
高く、土屋小学校の先生方の指導力の高さはも
ちろん、先生の言うことをちゃんと聴いて守れ
る良い子が多いんだなという印象を抱きました。
少なくとも私が小学生の頃はこんなに良い
子ではなかったように思われます。

私が学校ボランティアを通して一番印象に残
り、かつ最も多く思うところがあったことはや
はり、毎回の給食の時間であったように思われ
ます。私が一緒に給食を摂った学年は1年生が
最多で、1年生の給食はみんな賑やかに食べ
ているという印象がありました。私が来て間も
ない頃はまだ給食に慣れていないせいか、給食
を食べきれない子どもがよく見受けられまし
たが、時間が経つにつれてだんだん解消してい
ったように思いました。1年生の一部の子はや
はり異人である私の存在が気にかかるのか、こ
ちらの様子を伺っているようなしぐさがよく見
られました。私はそのようなしぐさが見られた
ときはできるだけ子どもに向かって微笑みかけ
るようにしました。そのときの子どもの反応は
若干微妙な感じでしたが、あとからこちらの方
を見て少し笑っていてくれたりしていたので、
とりあえず悪印象は抱かれなかったかな？とホッ
としました。

また、私にとって全く未知であったのは校務
さんたちとの雑務でした。木の手入れや草刈り、
清掃など、一見単純そうに見えるこれらの作業

も、子どもたちへの配慮がしつかりなされてお
り、その実現のために校務さんによって様々な
工夫がなされていました。私がこれまで学生と
してあたりまえに享受していた安全や環境の裏
にはこういった人たちによるたくさんの手が加
わっていたんだなということを実感しました。

しかし、学校ボランティアを通して多くの発
見をしたのと同時に、自分にとって多くの課題
も見えてきました。

まず、根本的な課題として、やはりあまり積
極的なコミュニケーションが取れなかったこと
が挙げられます。他の学生ボランティアの人た
ちが子どもたちととても親しく接しているの
を見ていると、私は圧倒的に子どもたちと接す
ることが少なかったと思えます。さらに子ども
たちに対して適切な注意をすることもほとんど
できず、大抵はその場を見守っているだけにな
ってしまったことも挙げられます。これらの
ように自分で能動的に思考し、瞬時に判断して
過不足無く実行するという活動に関しては私は
まだまだ改善していかなければならないと思
いました。

しかし、できなかった事だけでなく、できる
ようになった事もありました。それは挨拶です。
私はたくさん子どもたちに対して自分から挨
拶ができるようになりました。小さな一歩で
すがこの成果を今後につなげていきたいです。

みずほ小学校・前期

18. 今後自分が心がけること ー抑揚と積極的に話すことー

生物科学科 科目等履修生 福田 晋也

私は平塚市立のみずほ小学校にボランティア活動に行きました。小学校では主に算数や体育、といった授業の手伝いを中心に行いました。今回ボランティア活動を通して先生方から、そして子どもたちの方から教えてもらい、今後自分が心がけていかなければならないことを書いていきます。

今後自分が心がけていかなければならない点はふたつあります。

ひとつは抑揚の大事さです。みずほ小学校の先生方は、子どもたち一人ひとりのやることをしっかりと観察しており、子どもの行動に対して叱ったり、褒めることをしっかりと行っていました。

私のボランティア活動の中で手伝いをさせて頂いたクラスは主に二つ、今年より教師として働く先生が持つクラスとベテランの先生が持つクラスでした。その中で同じ内容で褒めたり、叱ったりしたのに対し、子どもたちの反応の仕方が大きく異なっていることに気づきました。最初は信頼関係の違いが大きく影響しているのではと思いました。それも少しあるかもしれませんが、現場で先生方の授業の様子を観察していると、声の抑揚が大きくかかわっていることに気づきました。声の抑揚は自分が話す内容の中で大事だということを相手に伝えるのにとっても大切だと改めて実感しました。

私は今年教育実習に行きました。その時に実習校の先生より、声に抑揚がないという指導を受けました。実習高校やみずほ小学校の先生方の授業で、子どもたちと先生両方の様子を見ることができるようになって初めて、声の抑揚はとても大事なのだと気づきました。

ふたつ目は積極的に話すことです。ボランティア初日、私はみずほ小学校の先生より、「積極的に話してもらって構わない」と言われました。最初は子どもたちに失礼なことを言ってしまうのか不安でした。ですが、このことをできるだけ実施した結果、子どもたちから話しかけてくれるようになりました。あいさつや褒めたり、注意したりすること、そういった子どもたちとの何気ない会話が信頼関係を築くのに大事だと感じました。学校ボランティア、教育実習など学校現場に行く機会には、積極的に子どもたちと話をしなければならないと思っています。それは小学校や中学校というさまざまな環境で自然体の子どもたちを受け入れるためです。

教師になったら子どもたちとしっかりと向き合うことが絶対です。ちゅうちょしていたら、子どもたちと話す機会はなくなりますし、子どもたちとの信頼関係も築けないと思いました。

ボランティア活動は今回で三度目になります。ただ、都合により週に一回程度の参加でした。もう少し多く学校ボランティア活動が出来ていれば、私の心がけなければならないことをより多く見つけることが出来たのではないかと後悔しています。今後学校ボランティアなど、現場で手伝いをする機会があれば、積極的に参加したいと思いました。

羽沢小学校・前期

19. 教師のあり方

国際経営学科 3年 佐藤 彩香

〔学校名〕横浜市立羽沢小学校

〔活動内容〕特別支援学級、またはその児童が
受ける一般級でのサポート

私がこのボランティアを始めたきっかけとなったのは小学校の教師を目指しているためである。現在、玉川大学の教員養成プログラムを受講しているが、通信教育では現場の雰囲気や、どのような授業を展開しているのか、そのようなものは見えにくい。そのため、私はこのボランティアを通し、児童と触れ合いながら、今後に向けて今の教育のあり方を吸収していきたいと考えたためボランティア参加を希望した。

ボランティアを始める前、児童たちと触れ合うことができるという期待と、先生に指示されたことをこなせるだろうかという不安が交錯していた。その時、担当になった活動内容は特別支援学級のサポートである。具体的な活動は、児童の不明点を指導すること、態度を注意することはもちろん、児童と共に楽しく授業に参加することである。

特別学級の先生たちはまず、児童一人ひとりに対して1日、1時間ごとの授業カリキュラムを作成していた。例えば、この児童には引き算のプリント復習を、あの児童にはまだ引き算は難しいからおはじきを使い、引き算という計算を理解させよう、といったことである。また、先生は授業に対しても工夫がみられていた。例えば、映像を見せてイメージを膨らませる、実際のものを持ちこみ五感で触れさせることなど、面白い授業を多くみることができ、とても勉強になった。特別学級の児童にも様々な悩みを持った児童が多くいる。上手く体をコントロールできない子もいれば、勉強が一般級と

違って遅れてしまっている子もいる。このように多くの児童に対して1つ1つカリキュラムを作成していくことはものすごい根気と児童に対する愛情が必要なのである。自分が児童としてではなく、教職を履修している者として見たこの教育現場はこのような意識が変化していった。

このボランティアを通して、特に印象に残った授業が2つある。1つは先生と授業中での丸付けを頼まれた時のことである。「大きな花丸を書いてあげると児童は喜ぶため是非やってほしい」とおっしゃっていた。褒めながら大きな花丸をつけてあげると、児童は私と初対面にもかかわらず笑顔で喜んでくれた。

また2つ目として、国語の時間の時のことであった。自分の好きな場面を朗読しよう、という内容で、グループで集まり朗読の練習をするという内容があった。そこでは、意見の対立や児童同士の批判等、人間関係特有の問題が生じていたが、多数決にしたらどうか、同じ場面の好きな子同士が集まるのはどうか、と様々な提案をしたところ、児童が納得してくれたことである。また、児童の朗読中もう少し大きな声を出せば他のグループよりも上手くなれると助言をしたところ、次の朗読では声が大きく出ていた。自分のアドバイスが児童に反映されていて嬉しく感じ、また指導をするということに少しの自信も感じた。

この印象に残ったことから分析したことは、児童の喜びは教師の喜びだということである。教師は児童のことをどれだけ考えているかで教師と児童との信頼関係に影響が出る。きちんと児童の想いに答えてくれる教師は理想の教師といってもいいだろう。また、新たに発見したことは、児童は難しいことを自分の頭が悪いから理解ができないのだと考えてしまう。しかし、教師からしてみると、自分の教え方が抽象的で、イメージがしにくくて、説明不足だから児童は理解ができなかったと考えてしまう。このように教師と児童が考えていることは食い違う部分

もあるということである。どれだけ知識のある教師でも児童の目線に立って、工夫された授業と優しい眼差しで成長を見守ることが重要である。

土沢中学校・前期

20. ホームページ作成

情報科学科 4年 奥村 友崇

ボランティアに行った学校は平塚市立土沢中学校です。活動内容としてホームページの作成を行いました。

私は、今までホームページを作ったことがありませんでした。だから、どのようにホームページが作られているのかわかりませんでした。しかし、今回のボランティアで、「ホームページビルダー」というソフトを使うと簡単に作れることがわかりました。そのソフトには、学校用のホームページのテンプレートがあったので、それをもとに作成しました。

また、自分の出身校のホームページや神奈川県内の他の学校のホームページを参考に構成していきました。

行うことは、用意された文章を打ち込んだり、写真などを張り付けたり、リンクを張り付けたりなど作業はそんなに難しいことはありません。ただ、「ホームページビルダー」の使い方はあらかじめ知っておくと作業がスムーズに進むと思いました。ホームページに掲載する写真や資料などは中学校が用意してくれました。それをスキャナーで取り込んで、「画像縮小専用ソフト」を使ってホームページに掲載する適切な大きさにしました。

注意することは、ホームページに関するファイル名は全て英字にしなければならないこと。また、縮小を行う際に、横だけや縦だけを伸ばしたりすると、画像が変に見えるので、引き延ばしたりするときは、必ず画像の4つの角を使って行う。さらに、写真を入れたり文字を打ったりするだけでホームページが完成するわけではないので、それをアップしないと実際のインターネットで見えることはできません。そのアップする際には「ページ転送」と「サイト転

送」を行います。その際に、パスワードやユーザーIDが必要なのですが、それは担当の先生が教えてくれると思います。これらを行うことでホームページは完成します。しかし、正しくアップされていない場合もあるので、アップしては確認するという作業を繰り返し行った方が良いでしょう。その時に、ホームページビルダーで打った文字の場所とインターネットで見た文字の場所が多少ずれていることもあるので、その確認も行う。最近では、学校だよりや年間行事の写真を張り付けるなど少しずつ更新していくくらいです。

このボランティアはパソコンと向き合う。生徒と関わることは一切ない。担当の先生がたまに見に来られるぐらいで、それ以外は全てパソコンで作業を行う。しかし、今回のボランティアをやって、ホームページを作ることの大変さを感じました。また、ホームページを作ったことにより、多くの方々から感謝の言葉を頂き、とても嬉しかったです。自分にとって有意義な経験になりました。

2.1. HPを運営する側としての心がけ

情報科学科 4年 羽田 基子

土沢中学校の情報の活動で、学校のホームページ作成、更新作業をしました。

3年次の10月から12月が作成期間で、4年の今期は主に更新をしてきました。なので、今までの活動内容である、ホームページ運営について報告していこうと思います。

情報の活動は、中学校のホームページをゼロから作る、というものでした。

情報科に所属しているものの、数理系に偏っていたこともあり、パソコンに対してそんなに詳しいわけでもありませんでした。ただ、これからの社会ではインターネットは必要不可欠なものになるだろうし、学校のホームページを作

らせてもらえる機会は減多にないだろうと感じたので、情報ボランティアに参加しました。

まず作る前に、他校のホームページを見て、どのような構成になっているか参考にしていきました。多くの学校を見ていく中で、ホームページは学校の印象を決めることがあるということに気づき、しっかり作らなければ、と改めて強く感じました。

作業では「ホームページビルダー」というソフトを使います。このソフトは初心者向けに作られているので、HTMLなどの知識はなくてもホームページを作成することが出来ます。最初は手探り状態で色々操作していましたが、ページの新規作成やリンクの貼り方などは、探りながらでもしっかり出来るようになっていきます。ホームページビルダーのおかげで、初心者である自分でも作れました。また、作成したページはHTMLの言語で表示することも出来るので、プログラムを直接書き込んだりすることも出来ます。実際に、中学校HPの“更新履歴”の部分はHTMLで書きこんだものです。

ページを作る、リンクを張る、HTMLに書き込むといったことを自由に出来るようになったのは、まだまだ最近のことです。繰り返すうちに自然と力になってきました。技術的にも、他の学校のホームページを運営する方々に比べたら、まだまだだな、と感じています。他のホームページを見るときは、どうやってこのページを作っているのだろうという視点で見ようになりました。

この経験のおかげで、ホームページを作る際に注意する点を知ることが出来ました。最初は作るのに必死になり過ぎていて、他の人でも更新しやすいような作り方が出来なかったことが一番の反省点です。使用している画像ファイルの保存場所など、後から確認するとちょっと統一性がなかったのが…。

更新しやすいホームページを目指すことも大切だと思います。学校の情報を最新で更新し続けられることが、ホームページでは重要です。

このボランティアに参加したことで、学校現場を新しい視点で見ることが出来ました。また、ホームページの運営側として得られたことがとても大きいです。閲覧してくれる方々が見やすいようなページ作り、更新作業がスムーズに出来るような構成をする。これらを意識することを学びました。そして、ゼロから作り上げた達成感も強く印象に残っています。新しく出来るようになるという楽しさを実感しました。

2.2. 学力の二極化にどのように立ち向かうか

化学科 4年 四ツ家大祥

土沢中学校にて週1回、英語、理科の教科の支援、放課後の数学、英語の補習

私は学校ボランティアを通じて、体験の感想や今後の課題について以下のようにまとめます。

教科については、まず英語にて授業中にまじめに取り組んでいる生徒、そうでない生徒が見うけられました。なぜならば英語のように積み重ねが大切な科目では、前の段階でつまづいてしまい、勉強の内容、方法が「わからない」という状態になってしまい、それを放置してしまっているからさらにわからないといった状態が酷くなっているということが見られました。わからない状態が酷い子は、ペンで遊ぶ、授業の内容と関係のない単語などを辞書で調べる、寝るといった行動を示しています。そのような生徒が示す行動の意味を私なりに考えた際に、わからないから助けてほしいという生徒なりのサインなのではないかと思います。そのため授業中に関係のない行動をして教師の注意を引き、教師はただ叱るのではなく、生徒と寄り添って指導してあげることが一番大切なのではないかと考えます。そしてスモールステップで段階を1段階ずつ踏ませることで「わかる」、「楽しい」

といった学ぶ意欲を喚起させ、さらに「おもしろい」、「もっと学びたい」といった、生徒の意欲を向上させることで、生徒が授業に参加するようになり、学力の二極化が防げ、生徒にとって勉強が楽しいといったものになるのではないかと考えます。

私はそのような生徒を見たとき、今後はただ注意するだけでなく、どこから、何がわからないかということを見分け、その場所から少しずつ指導することで意欲を向上させ、生徒の能力を引き出せるようになりたいと思います。

次に、理科において、私は理科教員の志望のため授業の方法について学ぶということで体験させていただきました。授業においては最初の10分で日常的な会話で生徒とキャッチボールすることで、まず授業に対する学びたいと思えるような動機づけをさせ内容に入っていたのですが、会話の中でも地域の特性、日常生活とその時の授業の内容をうまく関連づけて指導しており、教師は一の事を教えるのに十の事を知らなければならないということはこのことではないかと思いました。そして全ての生徒が積極的に学びたい、知りたいという雰囲気の中で授業が行われるため、生徒が授業と関係のないことをしないため学力の二極化が起りにくいのではないかと考え、今後私もこのような授業を心がけたいと思います。

最後に放課後の補習について、ほぼ数学を見ていたため数学について以下のようにまとめます。数学も英語と同じく積み重ねが大切な教科ですが、数学は小学校からの積み重ねのため、わからない生徒にとって小学校段階からわからないが続いている生徒が多いのではないかと思います。理科離れを助長している一因でないかと考えます。中学1年生にとって小学校段階の分数、小数のかけ算、わり算といったものが苦手、できないといった子が多く見うけられ、また私の実習校でも多く見られた。補習では私は小学校の教科書をそのまま用いようと考えたのですが、生徒にも「できない子なりのプライドがあ

る」と担当の先生から言われ、確かにと思い生徒のプライドを傷つけないように、指導する際に気をつけなければならないと感じました。個別で4人に対して同時に教えていく中で、生徒一人ひとりを見て、個人差が大きいため、できた生徒に対して、ほめる、認める、といったことで生徒が喜び、さらに課題に対して積極的に取り組むようになったため、ほめる、認める、といったことがとても重要なことであると思いました。今後はさらに、家に帰ってからもしさらに取り組みたいと思えるように指導することにより、生徒の能力を引き出せるような教師になるために研究と修養に励みたいと思います。

2.3. 教えるということの難しさ

生物科学科 4年 小椋 光

私が今回学校ボランティアに参加させていだいた学校は土沢中学校でした。教科は主に理科でしたが、他にも数学と英語にも参加させていただきました。活動内容として、理科は実験室で実験のお手伝い、教室では机間指導をしながら生徒がわからないところを教えてまわるなどをしました。数学で問題のわからない生徒がいたら教えて、問題の丸付けもしました。英語も生徒たちの様子を見てわからないところを教えました。

私は前に小学校ボランティアにも参加させていただいたのですが、小学校では主に低学年を見たということもあって、子どもたちと遊んだり、給食を一緒に食べたり、工作したりということの方が多く、子どもたちに何か教えるというより、私も子どもたち目線で一緒に学校に参加するという立場から子どもたちと関わりました。

しかし今回の中学校ボランティアでは、生徒に勉強を教えたり、間違いを指摘したりという

何かを教える、指導するという立場から生徒と関わることができるという大変貴重な体験ができました。また、現職の先生の授業を拝見できるということも大変勉強になりました。理科では、授業の導入で実際に植物を持ってきてみんなに見せたり、学校にある植物を見に行ったり、わかりやすく例え話をしていたりしていて生徒に関心を持たせるための工夫がたくさんされているなと感じました。そのほかにも授業の進め方など、いいなと感じたところは、どんどん真似して自分に吸収していこうという意識で参加しました。

私が今回中学校ボランティアに参加してみても一番考えさせられたことは、生徒に勉強を教えるということの大変さです。簡単な数学の「 $8 - (-5) =$ 」という問題で、私は今では当たり前のように「マイナスの符号をプラスに変えてから計算する。」ということを頭の中で機械的に行って計算していました。しかし生徒たちに教えるときは、どうしてこういう解き方をしなければならないのか。ということを説明しなければ理解につながらないので、今まで機械的にやっていたことを説明するということとはとても難しいと感じました。英語では、「なんでbe動詞は動作じゃないのに動詞なの？」や「三人称単数形って何？」と突然聞かれてうまく説明できませんでした。今では頭で機械的にやってしまうことや感覚で覚えてしまったことを生徒にわかりやすく教えなければならないという「今となっては当たり前のこと」を教える難しさというのを実感しました。もっと中学生の立場になって考え、勉強しなければならないなと感じました。

また、生徒との距離間についても考えさせられました。学校ボランティアの学生という立場から、生徒にどこまでつつこんで関わっていいのか、どこまで注意していいのか、という葛藤が常に頭のどこかにありました。寝ている生徒がいたり、授業中先生の話を見聞かずに隣の生徒とおしゃべりをしている生徒がいたりしたので

注意しようと思うのですが、どこかで先生の邪魔になってしまうのではないかと、ここで注意したままです授業態度が悪化してしまうのではないかとという気持ちから、生徒と関わるということを躊躇してしまいました。小学校ボランティアでは休み時間や給食の時間など、子どもたちと話ができる機会がたくさんあったので仲良くなることができたのですが、中学校では授業中しか生徒と接する機会がなかったので、もっと積極的に生徒と関わっていれば注意もしやすくなったのではないかと思います。次に中学校ボランティアに参加する機会があれば、今回よりも積極的に生徒と関わってみます。

将来は中学校の教員を目指しているので、今の生徒がどのような雰囲気です授業を行っているか、先生がどのような授業をやっているのかを間近で見ることができ、とてもよい体験になりました。

2 4. 積極的に学習に取り組ませるために

生物科学科 4 年 工藤 若菜

ボランティア先：土沢中学校

理科、数学での授業内の補助、

理科の実験の準備、補助、後片付け等

私が今期行っていた活動内容は主に机間指導であった。特に数学の時間の演習の時に授業についていけない生徒の所で改めて解法を指導したり、理科の授業での計算問題の演習などで、担当の先生だけでは手がまわらない所を補っていた。また、植物細胞（オオカナダモ）の観察実験や硫化鉄を生成する実験では、実験器具を配ってまわったり、結果や考察をワークシートに記入させるなどの指導や、実験後には使用した実験器具等の洗浄を行っていた。

今年の2月から毎週定期的にボランティア活動を行っていて思ったことは、生徒の学力（理

解力）はいかに興味や関心を持たせられるかで変わってくるのではないかとということである。理科の授業の様子を見てみると、このことがいかに重要であるかがわかる。生物分野や地学分野に関しては、自分の身体のことであったり身の回りの生き物のことであったり、または今まで経験してきた身近な現象のことを取り上げていることが多いので生徒の興味・関心も比較的湧きやすいが、物理分野や化学分野の内容で日常生活の中で見ることでできないものを扱う場合は特に、生徒にとってはつまらないと感じてしまうことが多い。だからいかに物理分野・化学分野の内容を生徒に興味を持たせられるかが重要になってくるのではないと思う。

興味を持たせるためには導入をどのように行うか、または補助教材や実験をどのように活用するかが鍵となる。

中学校2年生で習う、「動物の生活と生物の進化」の単元の「生命を維持するはたらき」の内容で出てきた肉食動物と草食動物の歯のつくりの違いを教える授業の導入は私から見てもとても面白く、この内容についてもっと知りたいと思えるような内容だった。まず人間は肉食であるか草食であるかを考えさせ、そのあとに生徒たちが飼っているペットの食べ物やテレビや動物園で見たことのある生物を取り上げて、食べるものに応じて肉食動物や草食動物に分けた後、それぞれに共通している歯、肉食動物にしかない歯などの名称や特徴について指導していくという内容であった。この時の生徒たちの様子はとても楽しそうで、友人同士でお互いの歯を見てみたりと授業に対してとても積極的な姿勢がうかがえた。

この時の授業について、授業後に担当の先生にお話を伺ってみると、人間をはじめ、犬や猫などとはとても身近な生物であるため、例に挙げることで生徒の興味・関心を引き出しやすく、内容も入りやすいとのことだった。

このことから分かるとおり、導入はとても大切な部分なのである。しかし、生徒が興味を

持つような導入を行うためには、幅広い知識と表現力が教師に備わっていなければいけないと思う。また、自分の不得意な分野についても最低限のことについて知っておかなければならない。教師も苦手だと感じる部分こそ、生徒に興味関心を持たせることができれば良いと思う。

そのためにはやはり様々なことに興味を持ち、わからないことは解決するまでとことん調べていくという姿勢が大切だと思う。教育実習でも感じたことだが、私が苦手だな、面白くないという気持ちを持ったまま教壇に上がると不思議とその気持ちが生徒に伝わってしまう。しかし、しっかり教材研究を行い、板書や言葉選び、発問に工夫を凝らした授業展開ができると、その授業は生徒の反応も良く、皆が私の話をしっかりと聞いてくれていた。

この時の経験やボランティアでの経験をもとに、理科の様々な分野についてどのように行ったら生徒がより食いついてきてくれるのかを考えながら、様々な方向から導入を考えていき、生徒の学力の向上に繋げていきたいと思う。

2.5. 教師の目線 生徒の目線

生物科学科 4年 南 佳奈

私は平塚市立土沢中学校で学校ボランティアを行いました。私がボランティアで関わった教科は英語、数学、理科の3教科でした。どの教科でも大まかな活動内容はほぼ同じで、授業を後ろで参観し、プリントなどの個人ワークが始まると机間巡視を行い、生徒の質問に答えるといったものでした。また、理科の授業では実験の授業の準備、参観、実験補助、後片付けも行いました。

私が今回のボランティアで最も印象に残った出来事もこの実験の授業で起こりました。

この日の実験は「細胞の観察」をテーマとし、タマネギの薄皮と人間の口腔細胞の観察を顕微

鏡で行いました。この時、試料となる口腔細胞は生徒から採取したのですが、多くの実験班が細胞提供者を決める段階で揉めました。理由は大きく2つあり、1つ目は葉さじを口の中に入れることへの抵抗感からの拒絶、2つ目は採集の時に付着する唾液を友達に見せることへの羞恥心からの拒絶でした。私は中学校を卒業してから7年近く経っているのですが、確かに当時は思春期の真っただ中において、潔癖主義に磨きがかかっており、唾液などを非常に汚いものだと感じていた記憶があります。だから、生徒たちの気持ちが分らない訳ではないのですが、この時私が強く思ったことは「そんなことより、自分の細胞を観察できることに興味を持って積極的に細胞提供者として名乗りを上げてほしい。」ということでした。また、理科の先生もそのように思われてか、「積極的にやらない班は観察を行わなくてもよろしい。」と厳しい態度で細胞提供者を早く決めるよう、生徒を指導していました。

この時、私は生徒と指導陣の間に理解し合えない壁を感じました。生徒たちからすれば口の中に葉さじを入れて、友達に唾液を採取して渡すなどいくら勉強のためとはいえ、むしろ、たかが勉強のためには絶対にやりたくないことなのでしょう。しかし、私たち大学生からすればもう少し大人になって欲しいというのが本音でした。中学生に最も近い指導陣がこのような感情を持つのですから、先生方は私たち以上にこの感情が強かったと思われます。また、今回の実験でも数名の生徒が自分の口腔細胞が教科書に載っているそれと同じように見えることに感動していました。先生はこのような体験を多くしてきているのでしょうか。その経験より、ここで積極的に実験に参加することが生徒の大きな一歩になることを知っており、そのため実験を教科書で学ぶだけのものにしなかったのだと思います。

では、この壁を少しでも取り除くために私たちは何が出来るのでしょうか。

授業に参加した経験から中学生特有の潔癖症を取り除くのは不可能であるように感じました。よって、生徒からの歩み寄りには難しいと思います。しかし、口に入れる事を躊躇させる菓さじを綿棒に変える、教師が率先して見本を見せるなど、指導陣から生徒側に歩みよる余地はあると思いました。

今回のボランティアでは教師の目線から生徒に望んでいること、生徒の目線から教師に望んでいることの2つの目線から感じる事が出来ました。また、双方の歩み寄りの為には指導陣側が中学生特有の気持ちに敏感になるべきではないかと感じました。そのためには今回のボランティアで感じた大学生の目線からの授業参観の経験が生きてくるのではないかと思います。

26. コミュニケーションの重要さ

情報科 3年 松本 隆大

今回、わたしは毎週水曜日、2時間目（10：10～11：00まで）に土沢中学校で1年生の数学のクラスを担当しました。中学校での活動内容としては、授業参観し、中学校の先生がどのように生徒に教えているかを学んだり、授業でわからないところがある中学生にそこを教えてあげたり、机間指導を通して、教え方やコミュニケーションのとり方などを学びました。中学校でどの分野を学んだかというと、正の数、負の数のところや、その足し算、引き算、掛け算、割り算をやりました。ほかにも文字式や割合の計算もやりました。

活動を通しての自分の活動前と活動後の変化は、まず、最初のうちは、生徒たちとコミュニケーションをとるのがちょっと難しいと感じたが、最後のほうではどの生徒たちともわけへだてなく、苦じゃなくコミュニケーションをとることができるようになったのでそこがとてもよかったと思う。

この中学校ボランティアでいちばんうれしかったことは、生徒がわからない問題があったとき、聞いてきたので教えてあげたら、「なるほど。ありがとうございます。」と言われました。さりげない言葉だったけど、なぜかうれしく、先生は、この一言をもらうと、かなりモチベーションがあがるのではないかと思った。

ほかにも、生徒に教えにいったとき、自分の名前をおぼえててくれたときはとてもうれしかった。やはり、慣れないところにいて生徒の方からコミュニケーションをとってくれるのはとてもありがたかった。

今まで学校生活をしていただけ気付かず、今回この土沢中学校のボランティアを通して発見したことは、後ろから授業をみているので、生徒一人ひとりが、ちゃんと集中して授業を聞いているのかとか、やる気はあるのかとか、授業をちゃんと理解できているのかとか、後ろから全体を見渡すことができるため、少しではあるが生徒の状況が理解できるということがわかった。これは、このボランティアをした人でないとわからないことであると思うし、そういう意味ではとてもいい経験ができたとおもう。

ほかにも、生徒とコミュニケーションをしつかりとれば授業もスムーズかつ楽しくやることのできるとわかった。しかし、あまり生徒と距離が近すぎても、生徒と先生の関係がなあなあになってしまうので、その強弱のつけ方の難しいこともわかった。

ほかにも、このボランティアをやっている授業中うるさくする生徒がけっこういた。しかしそこに関しては、ボランティアで行っているわたしたちには、どうすることもできなかった。もし、教壇にたって授業をしていたら、注意することができたと思うが、ボランティアで補佐の形で行っていたので対応できなかった。でも、少しくらいなら、注意することができ、注意すれば聞くようになったのでそこはよかったと思う。

机間指導でもほかのボランティアで行ってい

る生徒とかさならないように自分の役割を見つけてしっかり指導できたと思うので、そこはこれから教師を目指す者としてはとてもいい経験が出来たと思うのでよかったと思う。

今回このボランティアで全体的にたくさんいいことや今まで知らなかったことを学べたので、この土沢中学校のボランティアに参加することができてとてもよかったと思う。

もし、もう一回このボランティアをする機会があったら今度は1年生だけでなく、2年生や3年生の授業にも触れてみたいと思ったし、数学だけでなく、ほかの授業ではどのようなことをやるのかにも興味がわいたので、ほかの教科の授業にも参加してみたいと感じた。

2.7. 学校ボランティアから得たもの

情報科学科 3年 松本健太郎

私は5月～7月の3ヶ月間、土沢中学校では毎週水曜日に1年の数学と3年の理科の授業のボランティアを行いました。しかし、ほとんど1年の数学を担当して、3年の理科は2回で1回は授業変更により1年の理科を担当しました。また、どちらの教科においても授業参観、机間指導を行い、数学においてはプリントの丸つけや黒板で問題の解答や解説も1度やらせていただきました。

まず活動を通して、生徒と接することが多かったことで、生徒とのコミュニケーション能力を得ることができ、生徒の知識・能力、現在の授業参加度（やる気）など生徒自身の気持ちや性格を知ること、また学校風景を知ることができました。その中で、主に1年生に関してですが、私が感じたこと、印象に残ったこと、初めて知ったことなどを書いていこうと思います。

まず、生徒の性格（接し方）に関して、今の中学生はシャイな部分があり、逆に生意気な部分もあり、とても接しにくく感じました。しか

し、ボランティアを何回か行った時には、生徒の方から話しかけてくれました。そこから「早く生徒に慣れてもらった方がいいのかな」と感じました。逆に、生徒と仲良くなりすぎると生徒がタメ口で話しかけたり、ちょっかいを出してくることもあるので注意しなければいけないと思いましたし、しっかり「ダメだよ。」と注意できるようにしたいと思いました。しかし、タメ口で話しかけたり、ちょっかいを出すという事は私に対し、打ち解けてくれている証拠でもあるので本当は嬉しかったです。以上の事から、このようなボランティア活動は生徒とコミュニケーションをとる良い機会になりました。

次に、生徒の知識・能力、現在の授業参加度に関して、数学が出来る生徒、出来ない生徒の差があると感じました。ですから、授業参加度は出来る生徒は授業に集中しておらず、先生に注意されることが多かったのです。逆に、出来ない子は集中していました。なかには、普段から先生に「うるさい」と注意されている生徒もいましたが、その生徒と先生のやり取りがクラス内の雰囲気をよくしているようにも見えました。このように生徒をクラスのムードメーカーにしたやり方も良い方法だなと思えました。机間指導時に関しては、出来ない子は先ほども述べた通りシャイな部分もあるので、なかなか自分から質問をしてくれませんでした。このことを知ったので、生徒の様子から、悩んでいるように見えたら自分から話しかけようと思い、実際に行動として行いました。その結果、ボランティア後半では生徒から質問をしてくれるようになりました。また、知識・理解に関しては、計算ミスなどの惜しい間違いをしている生徒が多かったです。その原因は、途中計算をしないからだと思います。その理由としては、途中計算を面倒とする生徒が多かったので、途中計算の大切さを教えていくことが最重要だと思いました（実際に指導もしました）。さらに、小学校で習った分数の計算、現在習っている符号付

きの計算ができていない生徒が多かったです。機会があれば、土曜の学習会で指導したいと思います。

最後に、ボランティアを通して、実際に授業を参観することができたので、先生の授業方法、板書方法から得たものが多かったです。また、先生の授業方法・板書方法から自分なりに「このようにしたい」「この方法いいな」など考えることもできました。これらの経験を模擬授業に生かしていきたいです。

このように、ボランティアを通して得たものはたくさんありました。これらの経験を将来に生かしていきたいです。そして、また機会があったならばボランティアに参加したいです。

28. ボランティアを通して

情報科 3年 佐々木大輔

土沢中学校 授業補佐及び補講指導

伊勢原高校 部活動支援（バドミントン部）

土沢中学校では、おもに数学や英語の授業補佐と月曜日、土曜日の補修、1日補佐を行っていました。

数学や英語の授業補佐では基本的に授業に入って生徒が問題を解いているときに分からないところはヒントを出したり教えたりすることや生徒のスピーキングの相手になったりしました。授業に入るたびに生徒が頼ってきてくれるので毎回行くのが楽しみになりました。

月曜日、土曜日の補習は数学の指導をしました。2年生の数学をみることが多く、文字式や四則計算が基本的に指導することが最初のうちは全く解けなかったのが少しずつ解けるようになるのを見て教えている自分もうれしくなりました。それにテストで点数上がったりと「佐々木さん、前回より点数が上がったよ。」と報告してきてくれたりもしてくれました。

テスト前の補習では、3年生も一緒に見てい

て、3年生は入試にかかわるってくるので一所懸命取り組んでいて応援したくなり指導にも気合が入って一緒に頑張りました。

1日補佐では、数学や英語の授業だけでなく、音楽や社会、道德などの授業にも参加しました。おもに、後ろ側で授業の見学をしていました。道德では、修学旅行の班分け、新幹線の席決めのお手伝いや席がえのお手伝いなどをしました。修学旅行の準備をしている生徒をみると、自分も修学旅行に行くときはすごい楽しみにしていたなと思い出しました。

伊勢原高校にも教育委員会を通してボランティアに行っています。伊勢原高校では、部活動支援としてバドミントンを教えに行っています。

しかし、私はバドミントン経験がなく、指導をしに行っているというよりは指導してもらっている感じがします。

ですが、もし自分が教育現場に入ったとして自分がしていた部活動を持てるかはわからないのでこれも一つのいい経験として行かせていただいています。

最初に行った時には、バドミントンの基礎打ちも相手にならなかったで、自分なりに練習をして最低限は打てるようにはなりました。コミュニケーションに関しては生徒も自分も緊張していて、話すことがままならない感じでしたが、基礎打ちをしたりゲームをしたりしていくうちに少しずつ打ち解けてきて、ちょっとずつ話せるようになりました。

バドミントンの指導は、そこまでできないかわりに、意識や生活面に関しての指導をしています。

実際に、サークルの代表をやっているので男子バドミントン部の部長からは相談をうけてどのように対策すればいいかなど知恵を出したりもしています。

このボランティアをやっていてよかったと思うのは、先生ではなくボランティア学生だから先生よりも生徒の本音を聞けるというところで

す。

普段、先生には言えないことの相談を受けたり、友達みたいに話すことができるので生徒がどのように思っているのかが分かるので、もし自分が教職員になった時にどう対策しようか考えています。

二つのボランティアを行って、共通するのが生徒と一緒に学ぶということを体験できるということです。これからも行けるときはボランティアに行こうと思いました。

29. 生徒中心の授業づくり

情報科学科 3年 清水 弓佳

私は平塚市立土沢中学校に行ってきました。月曜日の放課後の16時頃から17時頃の1時間の補習の時間でした。図書室を使い、1テーブルに教員またはボランティア学生が1人と生徒が1～6人座り、主に、数学に不安があるという子や数学が苦手な子にプリントや教科書などを解いてもらい、分からないところやつまずいたところを解説したり、ヒントを出したりするという活動でした。計6日参加し、私が担当したのは中学1、2年の女の子たちでした。

学校ボランティアに参加する前の自分は、学校ボランティアに何で参加しなきゃいけないのだろうとか課題や授業も忙しいのにと、積極的に参加しようとは思っていませんでした。しかし、実際に学校ボランティアに参加してみて、今までなぜ参加してこなかったのだろうと反省しました。それは、教科教育法などで模擬授業する時に自分中心になってしまっていたことに気がついたからです。どうしたら、わかりやすい授業になるか、興味の持てる授業になるかを考えるときにこれぐらいはわかるだろう、このくらいは説明したほうがいいだろう、ここは大切だから強く言おうなど生徒のことを考えるというより、自分が授業を受けた時にどう思うか

など自分中心に授業を作って、実際に中学生や高校生に教える、授業して理解させるというイメージが出来ていなかったと思いました。

また、誰かが模擬授業をしている時などに、生徒目線での授業はどうだったかなどを考えるときに、生徒だったらこう思うのではないかというより、自分が解りやすい授業だったかどうかや、自分が聞きやすかったかなど、聞く側や見る側の時も自分がどう思うか、自分にとっていい授業だったのかなど自分中心の見方になってしまっていたと思いました。

実際に学校ボランティアに参加して、中学生と触れ合って、補習の時間だから教えるということは少ないものの、自分の想像以上に些細なことでも疑問に思い質問してくるということに気がつきました。それは、補習に関係のあることから、関係のないことまで不思議に思うことはなんでも質問されました。例えば、なぜこの筆箱を使っているのかとか赤丸が大きいすぎないのかなんていつも髪下ろしているのかなど自分が想像していなかったこと事をたくさん質問されました。補習の時間でこんなに質問攻めに合うのだから、もし自分が授業する側だったら生徒から話し方、黒板の使い方、図の大きさなど色々つまみこまれるのではないかと思います。こんな風に授業をしたらどんな質問を受けるのだろうかとか、ここでこんな作業したらこういう質問されるだろうから次に繋げるにはこうしようとか、生徒中心の授業が少しずつイメージできるようになりました。

また、他の人が授業をするときに、どんな風に授業を聞いてどんなふうに質問してくるだろうとか、こういうことを疑問に思うのではないだろうかなど、自分中心ではなく生徒の目線になって少しずつ考えながら授業を聞けるようになりました。

今後も、この経験を生かして、模擬授業をするときや指導案を作成するときに、生徒が積極的に参加出来るようなものにしていくとともに、時間がある限り学校ボランティアにも積極的に

参加していきたいと思っています。

30. 「1 クラス、生徒・数十人」をどう捉えるか

情報科学科 3 年 堤 有起子

今回は土沢中学校にボランティアに行かせていただきました。1 年生 2 年生の数学の授業を主に補助し、放課後は 2 年生の補習を行いました。授業補助は生徒が演習を行っているときに手が止まっている生徒に対して一緒に問題を解いたり、授業内容をゆっくり説明し直したりして理解を促しました。また、補習では担当の先生から指定されたプリントを演習、解説をし、必要ならばその日の授業内容の復習を行う場合もありました。

私は普段、アルバイトの集団塾の講師という形で中学生と触れ合っています。授業中はもちろん、プライベートな相談などを通して現代の中学生の実態はある程度把握しているつもりでした。ですが、塾というのは 1 日のうちの 2 時間程度、さらに言えば 1 週間のうちの数日程度の話です。そして生徒たちにとって「学校の先生」と「塾の先生」というのは、勉強を教えてくれるという点では似ていますが、生徒たちはやはりどこか決定的に違う立場として捉えているようです。では、学校における中学生はどのように授業を受け、どのような悩みを持ち、それらを先生方がどのように把握しているかなどを知りたいと思い、今回ボランティアに参加させていただきました。

実際に授業の補助に入ってみると、「授業がわからない生徒」といっても一概には言えないことを実感しました。自分でもよくわからないけどやる気が出ない生徒、理解したい気持ちがあるのに「授業」についていけない生徒、しっかりと話は聞いているのに理解できなかったり勘違いをしていたりする生徒、集中力が持たない生徒…。指導の先生もそれをよく理解して

おり、対応しつつ授業を進めていくのですが、30 人以上いるクラスでは授業の進度も考慮すると限界がありますし、クラスというのはなかなか生徒が意思表示することが難しい空間でもあります。学年を重ねれば重ねるほどその傾向が強い気がしました。そこで私たちボランティアが一人ひとりを補助していくのですが、このように様々な生徒がいると補助の内容も工夫しなければならないことに気がつきました。生徒に説明するといっても 1 から 10 まで教えてしまっては意味がありません。もちろん生徒によってはそれが必要な場合もあると思います。しかし、大事にしなければいけないことは「生徒が考えて理解する」ということです。指導側の独りよがりな「考えて理解する」機会を奪ってしまえばいけないのです。私は 1 の発問で 5 わかるような補助を心がけました。さらに私の発問を今度は生徒自身が自問自答できるように促しました。生徒が「問題を解けるようになる」ということは、様々な場合に当てはめて試行錯誤すること、またいずれそれを反射的に解法に繋げることができるよう演習を繰り返すことだと思っています。また、生徒の中には「自分流」で解いている生徒も少なくなく、それだに対応できなくなる問題が出てくることを生徒自身は理解していません。その点を熱心に説明し、発問を樹形図のように広げながらしていったところ、生徒が自分自身の力で解答に近づけることが多くなりました。

学校の先生方は生徒一人ひとりの学力や精神状態をよく理解していました。学力面では誰がどのように理解できないのか、どういうものなら理解できるのかということを、精神面では生徒一人ひとりの家庭環境や友人関係、ストレス状態などを把握し、時と場合も考慮しつつ生徒に対して適切な対応をしていました。

今回ボランティアを通じて「一人ひとりと向き合うこと」を見て学んで実感しました。学校とは生徒の一日の大半を占める環境です。教師はクラスの授業、ホームルームを受け持つこと

になりますが、クラスをクラスとして見るのではなく生徒一人ひとりの存在をきちんと認識し、一生徒の人生の一部に関わっているということをしっかりと自覚しておかなければならないと改めて実感しました。

3.1. 学校ボランティアでの経験

情報科学科 3年 永見 宏樹

今回の学校ボランティアで私は土沢中学校に行き、毎週水曜日の1時間目(9:10～10:00)に3年生の数学、2時間目(10:10～11:00)に1年生の数学を担当した。土沢中学校での活動内容は授業のとき後ろに立ち先生の授業の様子を見ていたり、問題演習のときに、机間指導をして、生徒がわからない問題を教えてあげたりした。

学校ボランティアで印象に残ったことは、まず、私が通っていた中学校では緊張のせいか1年生の初めのころはみんなとてもおとなしかった。授業中も最初のころはみんな静かで休み時間もあまりはしゃいでいる人はいなかったが、土沢中学校では1年生がとても元気がよく、休み時間はみんな楽しそうに遊んでいたり、授業中も元気で雰囲気がよくとても楽しかった。元気が良くて授業に集中できなかったらよくないが1年生のクラスでは授業で集中するところはちゃんと集中していていいクラスだと思った。学校ボランティアに行った最初のころは、生徒とうまくコミュニケーションをとることができず、問題演習のときに生徒が困っていたら教えてあげるとのことだけだったが、何回も土沢中学校に行くにつれて、授業中など机間指導をしているときに生徒のほうからわからない問題について聞いてきたり、気軽に話しかけてきてくれたりしてうれしかった。いろいろな生徒とコミュニケーションがとれるようになると質問してくる問題が同じであったり、どこの計算を

よく間違えるかなど、生徒があまり理解していない内容や場所が少しわかるようになってきた。また、何回もクラスに行くと「今日は元気がない」とか「イライラしてる」とか「眠たそう」とか生徒の状況が少しずつわかるようになってきた。けんかやいじめにつながることもあると思うので生徒の変化に早めに気が付くというのが大切だと改めて思った。また、学校に行ったときに生徒があいさつをしてきてくれてうれしかった。教室に行くまでの間や帰るときに廊下ですれちがったときに学校の先生や部活の先輩以外の人にもあいさつを生徒のほうから行っていて、とてもいい学校だと思った。3年生では、授業中に寝ている生徒がいた。私も中学生のころ授業中に寝てしまうことがありテスト前にその時の範囲がわからずに苦労した経験があった。中学校での数学はこれからやっていく高校、大学の数学の基になる部分だからしっかりと授業を受けて内容を理解しておく必要があると改めて感じた。

授業を後ろから眺めていて思ったのは、先生が生徒とうまくコミュニケーションが取れていてすごいと思った。コミュニケーションをうまくとることで授業も楽しくできると思うし、雰囲気が良いと生徒が積極的に授業に参加できて楽しいし、内容理解を深まると思った。コミュニケーションがとれ、いい雰囲気の授業ができると数学が苦手な生徒でも数学の授業は楽しいからといって積極的に授業に参加するようになると思うし、そうすることで授業の内容もわかるようになると思うので生徒とのコミュニケーションや授業の流れがとても大切だと思った。

今回の学校ボランティアを通して、いろいろな学校があって、それぞれの学校で学校の感じも違うと思うし、自分が通っていた学校ではなかったことや、共通すること、また、今まで知らなかったことなど多くの経験ができた。さらに、生徒の様子を知ることや学校で先生の授業をみることは、ボランティアに行っていないと教育実習の期間でしかしか知ることができないの

で、今回実際に土沢中学校に行ってそういう体験ができてとてもよかったと思う。

3 2. 生徒が私に教えてくれたこと

情報科学科 2年 大月あゆみ

平塚市土沢中学校で1年・英語、数学、3年・理科の授業補助。数学、英語は主に授業に参加し、生徒が問題を解く補助をしました。また数学の授業は最後に少し、授業をさせて頂きました。理科は、実験器具を運んだり洗ったり、生徒の解答用紙の答え合わせをしました。

今回、土沢中学校で英語・数学・理科を教えてゆく中で、自分自身で、教えるということに関して、足りないものが何なのか、またこれから何をしてゆけばいいのか少しだけ分かった気がしました。

ボランティア活動前は、私は本当に誰かに勉強を教えるということも余りしたことがなく、学校ボランティアをやるとなった時に本当にどうしようかと緊張ばかりしていたが、活動が終わる頃には教えていたクラスの生徒たちとも慣れて、向こうから話しかけてくれるようになり、私にとってとても教えやすい環境であったと思います。

その中で、私は「人に理解出来るように」教えるというのがどれほど難しいことであるのかを痛感しました。

私は今回教えた3教科の中でも数学に重点を置いて教えました。数学は私自身が昔から最も得意な教科です。中学生の頃から数学を勉強していく上でほとんど苦労はしませんでした。また、同様に誰かに数学を教えるということもほとんど経験がありませんでした。それにより今回先生の補佐という形で生徒に数学を教えていく中で、生徒が分からない問題があったとき、「何故その生徒はこの問題が分からないのか」ということを全く理解することが出来ず何度も

戸惑ってしまうという場面がありました。私はこの時、今までの自身の経験の無さをとても悔みました。そして、最後の授業で少しの時間、実際に前に出て指導をする機会が与えられ、この時の経験から、生徒が理解出来る指導をするのは難しいと思いました。

私自身足りないところは挙げ出すときりがないほどあると思いますが、圧倒的に足りないのは経験ではないかと考えました。学校ボランティアより以前に何かしらの形で少しでも経験を積んでいれば、生徒たちにもっとよりよい説明をすることが出来たのではないかと思います。

今回の学校ボランティアという機会は私にとってとても貴重な体験を与えてくれました。自分自身の欠点を少しでも気づかせてくれ、また、教師という職業の面白さと難しさとやりがいを感じさせてくれました。

今後、実習などの時に指導して行けるように、もっと積極的に学校ボランティアに参加して、よりいっそう努力しようと思います。

3 3. 先生から生徒へ、生徒から私へ

情報化学科 2年 水戸 紘子

学校名 土沢中学校

教室に入ったとき懐かしさを感じた。後ろに貼られている自己紹介の紙、10分休みの慌しい行動。規則の厳しさに違うところがあるが、生徒一人ひとりの行動がいかに「中学生」らしく、その集団を見るのは新鮮な気がする。

活動内容は、数学・・・丸付け、解説、机間指導、英語・・・机間指導、理科・・・机間指導、実験準備、といったものだった。英語と理科に関してはほとんど私は必要なように思える。よって先生の授業を聞くことに専念できた。数学に関しては時には回りながら丸付けをする、あるいはわからない人に教えることもした。数学に

関してももちろん授業の組み立て方、教え方などを学習することができた。どの先生も中学生にとって魅力的な先生だと感じる。

まず数学の先生だ。数学の先生は駄洒落や面白いものが好きなのか、よく授業に取り入れていた。生徒にとっての馴染みは良く、皆一心に黒板を見ていたように思える。また数学を教えるときもわかりにくい箇所を証明した後、覚えやすいように数学と関係ないような発想から覚え方を導入する、あるいはこれもまた駄洒落を使用するなどして覚えさせていた。しかし演習時間に入ると解き終った生徒が一部ざわざわと話し始めてしまうのが難点であった。そこに關して先生は黒板に答えを書くように指名することもあったが、問題量が多く明らかに差ができてしまう場合、ワークに進むことなく話してしまう生徒がいた。また、それは解き終わっていない生徒以外にワークを進めている生徒にも迷惑がかかっていたように思える。

次に、英語の先生である。数学の先生から一変して厳しめな先生である。的確に英語の基礎(1年生であったため)を教え込んでおりわかりやすいと感じた。大文字、ピリオド等の生徒が忘れがちな箇所を強く指摘し、今後軽いケアレスミスで悩まされないように考慮していた。また、生徒との英語のやり取りも非常に自然的で、様々な内容の英語を生徒に浴びせかけるように話しかけていて非常に耳によいと思えた。こういった理由かはわからないが英語が嫌いという生徒がいた。特に英語が苦手そうなのでもなく、私が見回ったときもほぼ全て正解していた。どうしてそうなったかがわからないため、今後気をつけて見たい。

最後に理科の先生だ。非常に多くの豆知識を備えていた。生徒が興味の持つような内容を次から次へと出していき、中身が頭に入るような展開であった。私自身も生徒と同様に興味を持った部分は何点もあり、授業後、先生に質問したりもした。また、ノートがわかりやすく見やすいもので復習するのによさそうな気が

した。どうせならば、豆知識に関しても少しずつノートの端に書いてもいいのではないだろうかと思ったが、もしかしたら必要以上の内容をノートには書かないほうが良いのかもしれないとも思った。

自分ならばどうするだろう、どうやって生徒に伝えるだろう。そんなことを考えながら授業を見ていると他にも先生の些細な技巧が見えた。考え続けることで、今のボランティアとしての自分がすべき行動を考えることができた。数学の先生からはユーモラスな数学的センス、英語の先生からは強さを持った声と伝える力、理科の先生から多種多様な知識を学び、私は私の思う最善の生徒への伝え方を日々研究していきたいと思う。

34. 立場の重さ

情報科学科 2年 丸山彩恵子

土沢中学校1年生は土曜学習会、2・3年生は授業内の学習支援を行いました。大半は3年生の授業での活動でした。学習支援とはいっても、自分に出来たことは少なく、ほとんど中学校の先生の授業の見学に等しいものになっていたと思います。授業運営上の工夫や、立ち位置など、学生の時には気にも留めなかったような細やかな気配りを目の当たりにしました。ボランティアとは名ばかりで邪魔になってはいないだろうかと思う節も少なくありませんでした。しかし、担当の先生も優しくご指導してくださり、多くの事を学ぶことが出来たと思っています。

今回の活動の中で一番印象に残っていることは、ある生徒の行動でした。土曜学習会初回、1年生の数学の支援を行いました。頼まれていたプリントを順調に終わらせて終了時刻のちょっと前に全てのプリントを終えた生徒に自分の癖を話しました。「今日帰ったら、寝よう」

と言う生徒に何気なく言ったことでした。今ではなかなか出来ませんが、自分が高校生のときに実践して結果に結びついたことでした。「今日やったプリントを帰ってから3回解いてね。」勿論返事は「え～」というものでしたが、休日にせっかく来てやったことを「やった」だけで終わらせるのはもったいないと、ちょっとしつこく食い下がってみました。3回目には満点を取れるように、1回目と2回目でちゃんと間違いを押さえてやるように伝えました。とは言ったものの、渋々の返事だったし、どうせやらないだろう、次の学習会には来ないかもしれないと思っていました。

2度目の学習会にその子は友達を連れて来ていました。それだけでも驚きでした。前は親にどうせ暇なのだから行くように言われて来たと言っていたので1ヵ月も空いたら来ないだろうと思っていました。学習会を始めて、その子が言ったことが今回の活動で印象深かったことです。「あのあと、帰ってからちゃんとやったんだよ。」ただただ嬉しく思いました。実際に計算にかかる時間や、間違い、ケアレスミスが減り、少しですが成果が出ていました。勿論、中学校の授業の成果かもしれませんが、解き直しなんてやっていないかもしれません。それでも、自分の言ったことに対して応えてくれたことが嬉しくて、あの時信じられなかった事を悔やみました。

そして、後になって、教師と言う立場が生徒にとってどんなものなのか、教師が言う言葉が生徒にとってどんな意味があるのかを改めて考えさせられました。私のような大学生の言うことをいよいよでも実行してくれた。生徒にとって先生の言うことは正しいこととして受け入れられる。こんな怖いことはない。それを知ったからといって、変えられそうにもない教師という目標を達成するために私が努力しなければならないことは、少しでも多くの事を知り、正確な情報を持っていることだと思いました。今までの「○○だと思う」はただ生徒を混乱させる

だけで、生徒にとって有効なことにはならない。確かなことを集めて伝えるためには、いろいろな事を知っていなければならないという結論に至りました。

自分が今目指しているところは、これから作るのに最も大切な立場で、その責任は決して軽いものではないことを、あの生徒に再度教えてもらったように思いました。今回の事をしっかり身に付けて、自分の目標に恥ずかしくないように、何でも挑戦できる今を有効に利用していきたいと思っています。

今回こういった体験をさせてくださった先生方、なにより一緒に勉強をしてくれた生徒の皆さんに本当に感謝しています。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

3.5. 教師の夢への第一歩

化学科 2年 和地 翔平

主に水曜日の1.2.3限に土沢中学校にボランティアにいきました。活動内容は、授業補助、実験補助、テストの採点でした。

活動を通して、中学はもう5年も前のことだったので、今現在の中学校のいろいろな現状を見ることができて、とてもためになりました。現状としては生徒の実態とかの変化は全くなかった。しかし、教科書やドリルは変化があり、とてもためになりました。私が中学校にいたころに比べ、カリキュラムが全く違い、高校で習うようなこともやっていたのでとても驚きました。特に理科です。理科のイオンなどは中学校では全くやらなかったのに、今では中学校で教えている。中学校の教師になったら、このようなことを教えるのかと実感しました。

テストの採点は理科、数学ともにやりました。テストを採点してみて、勉強がとてもできる生徒とできない生徒がいることがよくわかりました。見る限り、数学は最初でつまづいている生

徒は点数が良くない傾向にあることが分かりました。中学校の理科は、理解して暗記すればできる問題ばかりなのだが、理解が足りないのかなと思いました。

実験の補助としては試薬の仕分け、試薬の分量の計測を行いました。中学校で使う試薬・薬品だからといって危険でないわけではないので、私たちが生徒に配ってあげました。実験は生徒全員が好きそうで楽しそうにやっていた。今現在若者の理系離れが深刻になっているが、理科自体嫌いではないのではないかと感じました。

授業中は、生徒でも先生でもない立場から先生の生の授業を見ることができ、「こういう教え方もあるのか」と強く感じ、自分にとっても、とてもためになりました。また授業後は先生から「あの問題は、こんな解き方もあるよ」と教えてくれました。

授業中、突然先生に指名され教壇に立ち、生徒に説明することがありました。最初はいきなりだったのでとても緊張しました。自分は分かっていることを分からない生徒にどう教えればいいのか分からずとても悩みました。その後は毎回のように指名されていたので慣れていきました。今思えば、黒板に字を書いて、実際の生徒に教えるというのは、めったにできないので、いい経験をさせてもらったと思っています。しかし、いざ後ろから見ると、自分の字は小さいし汚いし、とても見にくい字で、これでは生徒が板書をとる気にはならないと感じました。そこで改めてやっぱり先生はきれいな字だなと感じ、板書したくなる字だなと思いました。

当初は土曜講習の担当ではなかったのですが、先生にお願いし、やらせてもらいました。その日はちょうど七夕で、生徒はあまり来ませんでしたが、私は2人の一年生に数学を教えました。ただ2人の問題を解くペースがまるで違い、とても苦勞しました。しかし生徒が分からないところを丁寧に教えてあげると生徒も喜ん

でいました。また、教えた問題と同じような問題が出たら、「さっき教えてもらったからできる」と言って解いていたので、とてもうれしく思いました。また、その後の授業中も「教えてくれたからわかる」と解いていました。

このボランティア活動を通して、教師はやりがいのある仕事だなと改めて感じる活動になりました。

36. 学校ボランティアをして分かったこと ～授業をする難しさ～

化学科 2年 一ノ瀬智弘

土沢中学校 2年A組・3年B組・3年B組 理科 3年B組 数学 授業補助・実験準備

私は今期、土沢中学校に学校ボランティアに行きました。今まで小・中・高と生徒の立場で授業を受けていた中、今回の学校ボランティアは初めての教える立場だったので今まで感じたことのない授業として時間を過ごせた。初めて土沢中学校を訪れて、授業補助する教室に入るまでは高校時代などに友達に勉強を教えたりしたことがあって、同じように教えればよいと考えていたが、現実と思うようにいかなかった。

初めての授業補助の最後に先生がボランティアに行った私たちに「塩素についてなんでもいいので生徒たちに教えてあげてください。」とおっしゃってくださった。教える側として私たちに機会をくれたとき、私は自分の順番が回ってくる前に何を言おうか考えていたのに私が話す順番になったとき、私は緊張と度忘れで何度も言葉をかんでしまい結局先生にサポートされつつ生徒たちに教える形になった。授業が終わったとき、私は教室に入る前とは違う気持ちで生徒に物事を教える難しさを学校ボランティアを通して初めて実感した。私は生徒のころ、授業とは黒板の板書をノートに写して定期テストで良い点を取り、良い内申をとればよいと考えていた。なので、先生方が私たちにいかにし

て分かりやすく教えようとしていろいろと工夫していたことが分からなかった。だが、今回のボランティアで土沢中学校の先生方は板書をコンパクトかつ要点をしっかりと押さえて分かりやすくしていた。生徒が授業に興味をもつように理科では、身近な科学現象や世間で話題になっている科学の出来事を現在授業で教えている単元に関連づけて分かりやすく授業の内容を教えていた。このような、生徒への授業の教え方は学校ボランティアに行き初めて発見した。

授業補助の代わりに5時間目の別の学年が行う実験の準備を手伝った。実験の準備はボランティアならではのことで、私は薬品の計量を行ったが、このときはもう一人ボランティアの友達がいて作業を分けて行った。中学生のときは実験の薬品等はあらかじめ用意してあったので、先生方は忙しい中いつも私たちの学年の生徒が用いる薬品等の準備をしてくださっていた。理科にとどまらず、ボランティアに行き改めて今まで授業のためにいろいろと準備してくださった先生方に感謝したい気持ちを持った。

今回、土沢中学校にボランティアに行き学んだことを改めてボランティアを終えて確認して、新米の教師になったときにいかせるようにしたいです。土沢中学校に約2カ月ボランティアでお世話になって、今まで生徒として見てきた立場から教える側の立場に代わったことで、今までの考え方を変え生徒のことを第一に考え、かつ今回学んだことを教師生活にいかせる教師になりたいと強く感じました。

3.7. 生徒との関わり

化学科 2年 島田 諭

今回、土沢中学校へと英語・理科の授業補助としてボランティアに参加した。また、学校においては授業中の生徒間の巡回、実験の準備の

補助、英語の授業においては生徒の英文作成の補助を行わせていただいた。また、空き時間では割り振られたクラスのものではなかったが数学の小テストの採点なども行った。ボランティアとしての活動は6時間分と少ないものではあったが其処から学び取れたものは多く、全てを習得するという事は出来ないほどであった。

ここで、活動に関して振り返ろうと思う。今回の理科・英語の担当クラスとして受験・進路選択を控えている3年B組へと割り当てられた。始めの内はクラスの後方にて授業を静観するという事が多く、またクラスの生徒もこちらを気にしてはいるものの、話し掛けてきたりすることも無くチラリとこちらを見ては机に向かうことが多かった。こちらとしても回数を重ねるうちに馴染み、いずれは話しかけることが出来るのだろうと思っていた。しかしどのように接すれば馴染むことが出来るのだろうか、下手に出た場合に今よりも関係が悪化してしまうのではないだろうかという思いから、なかなかこちらから近づくことが出来ずにいた。もっとも授業の雰囲気も乱してはならないのだとも思い、真剣に取り組んでいるところに横やりを入れるような真似はしたくはなかったのだ。そうするうちに2回、3回とボランティアの回数だけが過ぎ、気が付けば折り返し地点まで来ていた。

その日の担当教科は英語だったのだが、自分が中学生であった時に受けた英語の授業とは違い、「より本格的な英語を」という方針を取っていると事前の説明会で聞いていたこともあり、固い授業で理科のように生徒に話しかけ辛いのではないだろうかとのどこかで不安と一種の諦めの念を授業前まで抱いていた。授業担当の先生曰く、「楽にして生徒が分からないと悩んでいるのであれば補助してあげてください」との事だったがそのように思っていた為「わかりました」と言いつつもどうしようかと悩んでいた。定刻となり授業が始まる、授業らしい授業が始まるのだと思っていたが、担当の先生は授業を楽しませるという方針なのだろう

か基本的な質疑応答はほかの授業と変わらないものの、その授業には他と明らかに違うものがあった。クラスの雰囲気である。生徒も先生自身も笑顔が垣間見え勉強というよりも会話を楽しみ、そこから学んでいるといった印象を受けた。

さらにその雰囲気がもたらしたのは生徒がボランティア側に積極的に向かってきたということだ。先生の配慮もあったのだろう、こちらに話題が振られることもあり生徒との接し方に迷っていた自分には有難い事この上なかった。その日のボランティアが終わってもこの日にした生徒との何気ない会話を喜んでいたことを覚えている。その後3回の理科の授業補助としてのボランティア参加をしたがクラスの中での見られ方が徐々に変わっていくように感じ、生徒に対して話しかけることも以前より増えて行った。やはり話しかけられたことも話したこともない人間が教室内にいる事と何度かではあるものの話し、慣れることが出来た人に対しての見方は違うものであるとつくづく感じた。

些細なことでも良い、表面だけでも良い、ただそれについて話し合うだけで生徒との関わりが深まるきっかけとなる。それが生徒との関係を築き、互いに信じ・頼りあえることなのだと今回のボランティアに参加して考えさせられた。

3.8. 授業で大切なこと

化学科 2年 鶴間 貴之

私は学校ボランティア演習で土沢中学校に行き、数学と理科の机間指導、実験の補助などを主に行いました。

私はこの「学校ボランティア演習」を履修してよかったと思うことが大きく分けて二つあります。一つ目は、実際に生の生徒と触れ合えたことです。今の中学校にはどのような生徒がい

るのか土沢中学校に行くまでよくわかりませんでした。実際に行ってみると、学年によって授業の雰囲気がだいぶ異なっていました。それぞれのクラスが個性的でクラスによって授業スタイルを変えなければならぬと感じました。

一年生ならまだ小学校の雰囲気が残っており、授業中の私語などが絶えませんでした。そこで、私が教師側の立場になったらどのようにして生徒にメリハリをつけさせるか考えなければならぬと感じました。

二、三年生になると授業に参加しない生徒が何人かいました。授業中寝ていたり、読書をしていたり、ノートを取らなかつたり…机間指導をしている際にこれらのことを多く見かけました。このような生徒を無くす(減らす)ためにはどのような対策ができるかも考えなければならぬと実感できました。

二つ目は中学校の先生の授業を見学し実際の授業に参加させてもらえたことです。授業中多くの時間は教室の後ろの方で授業を見学していました。先生の伝え方、生徒の反応などを主に見ていて、先生は生徒が授業中飽きないように、関連した身近な話などをして生徒の興味を引き付けていて知識の深さに感動しました。自分も将来はより多くの生徒が授業に参加できるように教科書以外の知識も必要だと感じました。また、数学の授業では、生徒が見やすい板書の仕方などを指導していただきました。大学生が実際の授業現場で授業することはそうない経験なので、とても充実した時間となりました。

理科の授業では生徒と一緒に実験を行いました。化学反応や細胞の観察を行いましたが生徒のリアクションがとても新鮮で真剣に取り組む態度が見られました。私が中学の時は実験をあまりしませんでした。生徒のリアクションを見て理科の教科において今実際に進行している事象を見て考察できる「実験」は大切にしていかなければいけないと実感できました。

以上の二つがボランティア演習を行って感じられたことです。今回の演習を通して今まで気

付けなかったことを多く知ることができました。大変貴重な体験ができ、またいっそう教師になりたいと感じられました。

39. 新しい視点から見たこと ～先生になるのに必要なこと～

化学科 2年 矢部 丈登

僕は、土沢中学校にボランティアに行かせて頂き、主に授業の様子を観察させてもらいました。また、その中で時々、様々な活動を通して、生徒と触れ合う機会を持つことができるときもありました。

今回、学校ボランティアを通して、生徒と同じように授業を受ける機会を持てましたが、生徒とは違う視点で学校の授業を見ることができました。また、生徒とは違う立場に立って授業を受けることで、初めて発見・感じたことが多くありました。今回は三つほど話したいなと思います。

まず、一つ目として、「板書って、予想以上に難しいな」と感じました。教科教育法が今期にあったので、「教科教育法の授業の板書の参考にしたい」と思い、学校ボランティアの理科の授業の際に板書についてじっくり観察した時がありました。その時、学校の先生方は板書慣れしているというか、字の大きさ、字のバランス、字を書く速さが丁度いいなと感じました。また、書いている字が斜めになったりせず、矢印などの使い方も上手なので、とてもきれいな板書が気付いた時には出来上がっていました。僕が見たとき、先生はノートなどを見ながら板書をしていたので、前もって準備してきたのだと思いますが、毎回の授業の前に、このような綺麗な板書計画を考えていることってすごい事で、そしてとても大変なことだな、と思いました。しかも他の科目の授業では、板書計画らしきものを見ることなく板書している先生もいました。生徒の時は板書を写すことに精いっぱい

だったので、学校ボランティアに行かなかったらこのことに気づくことができなかったと思います。なので、これからの学校生活で、板書するのに必要な、内容をまとめて、図示すること、黒板に上手に字を書くことになれるようにするなど、先生になる上で必要な技術について知ることができました。

二つ目は、「先生の人柄って、授業（指導）にすごく影響するんだな」と感じました。先生によって授業は変わるのとは当たり前ですが、先生の人柄がとても大きく影響しているのではないかと感じる場面が数多くありました。とてもおおらかな先生の授業は、授業の雰囲気柔らかく、また生徒に対する指導がとても柔らかいと感じました。そして、ちょっとかたい性格の先生の授業は、授業の雰囲気がやはりすこしかたいと思いました。しかし、この先生は授業の雰囲気を和らげようと、雑談をはさんだりするなど、色々な工夫をしていました。このことも生徒の時には感じることはできなかったと思います。生徒と違う立場に立って初めて気付く事だと思います。見学した土沢中学校の先生方の授業は、どれも良かったのですが、それは先生の人柄が良いからだと思います。なので、これからの大学生活を通して、自分の人柄を磨いていきたいなと思います。

三つ目は、「生徒一人一人の様子を見る事って、とても難しい」と感じたことです。今回、授業の様子を観察しているときに、机間指導をしようと思ったのですが、その時に、「生徒が板書写すのに邪魔にならないかな…？」と思い、思うように行動できないことが多くありました。しかし、生徒一人ひとりの様子を見ることは、先生として、大切な仕事のひとつだと思います。なので、これからどうやって生徒一人一人の様子を見ていけば良いか考えていき、自分なりの答えを出したいと思います。

今回、数回にわたる学校ボランティアを通して、たくさんの疑問を持ち、たくさんの「こうしたらいいのかな？」という答えを自分で見つ

けたり、先生、先輩から頂いたりしてきました。もし、学校ボランティアに行かなかったら、このような大切なことに気付くこと、そして解決することは出来なかったと思います。なので、機会があれば、また学校ボランティアに参加して、様々な疑問を持ち、それを解決していきたいと思っています。

4.0. 教育者の立場から見た教育現場

生物科学科 2年 西村 義樹

今回の学校ボランティア演習Ⅰでは土沢中学校でボランティアを行った。5月から7月までに計5回、3年B組で金曜5限の理科の授業補助員として主に活動した。時にはプリントの丸つけや実験器具の後片付けもした。

今までは生徒という立場からしか見たことがなかった学級や教師を、今回のボランティアを通して客観的に、教育者として見ることができた。「教科教育法」で仲間が行う模擬授業と実際の現場で行われる授業を比較したり、自分の模擬授業をよりよくするためにいいところを吸収したりと、とても勉強になった。

授業の補助をするボランティアという形で授業に参加させてもらっていたものの、実際には自分が将来教師になるための勉強の場として位置付けてみると、いろいろ感じるがあった。数回の授業を通して印象に残っているのは、教師が板書し、それを生徒がただ写して説明を聞くという一方的な授業ではなく、教師と生徒が互いにコミュニケーションを取り合いながら授業が展開されていたということだ。教師が誰かを指名するのではなく、クラス全体に対して問いかけをしたときは数人が答えるし、教師が話をしているときにそれに関して思ったことや質問があった場合には生徒自身から教師に話しかけていた。また、教師・生徒間だけではなく、生徒同士も意見交換をしていたのが印象的だった。

た。生徒同士が意見を交換することによって「あいつはこう考えているけど俺はこうだな。」とか「あ、そうそう！俺もそう思う！」というように、生徒自ら考えることにも繋がるし、そのやりとりを見て教師が授業を展開していくこともできるなあと感じた。教師・生徒間のコミュニケーションが大事なことは分かっていたが、生徒同士のコミュニケーションも意外に大事だということに気付いた。しかし生徒同士の話が盛り上がって授業とは関係のない方向へといってしまうこともあると思うので、そこをうまく調整するのも教師の役割であり、力量が問われるところだと思った。

教師の力量といえば、授業をいかにおもしろくして生徒の興味を引くかということもポイントになってくる。しかしそういう時に、コミュニケーションとして授業の中で生徒をいじって笑いを取るのもいいとは思いますが、それが後々いじめにつながったり、その生徒に嫌な思いをさせたりしないようにしなければいけないなあと考えた。これは客観的に授業を見ていたからこそ感じたことだと思う。

さらに授業を見て感じたことは、生徒に気を配りながら、教室全体を見ながら授業をしているなあとということ。先生は自分が黒板に書き終わったら机間指導をして生徒の様子を見たり、「ここは1行空けて書いてね。」と言ったりして、生徒のノートづくりにも配慮していた。また、理科の授業ということもあり、身の回りの事象と結びつけて生徒の興味を引くような授業をしていた。

授業の補助のほかには、理科室で実験器具の片付けをしたりプリントの丸つけをしたりした。生徒自身が行う実験は基本的には生徒が後片付けをすると思うが、それ以外の演示実験などではすべて教師がすることを改めて実感した。今回は片付けしかなかったが、実験ができるように一から準備するのも教師である。今まで生徒だった自分がスムーズに実験に取り組めたのも、その前に教師が試料を量り、器具を

揃えて準備をしてくれていたからこそのことだった。片付けをしながら先生に話を聞いてそう思った。

実際の教育現場を初めて教育者として見て、教師を目指している自分にとって、新鮮で意味のある時間を過ごすことができた。今まで意識したことがなかった授業中以外の教師は、思ったより事務的なことや、正直、手間のかかることをやっていた。ボランティア活動を行ったことで、いろんなことを見て、知って、感じることができたので、この経験をこれからの自分に活かしていきたい。

4 1. 学校ボランティアで得た有意義な時間

総合理学プログラム 2年 加藤 諄

私は土沢中学校に水曜日の理科と数学の授業の指導補助、数学の土曜日補習の補習指導で行きました。活動内容は、理科の授業では、実験の準備・片づけ、単元小テストの丸つけ等をしました。数学の授業では、解き方がわからない生徒のところまで行き、一人ひとりが問題を解けるように指導してきました。土曜日補習では参加した生徒に合わせ、先生が用意してくれたプリントに沿って解けない問題を1つ1つ解説し、わからない問題をなくすよう指導していききました。

学校ボランティア活動を通して感じた事は、何より楽しかったという事です。学校ボランティアに行く前や1回目、2回目のボランティアの時は緊張して何をしていたかわからずいました。しかし、土沢中学校に行く回数が増えるごとに段々と緊張がほぐれていき、学校ボランティアを楽しめるようになっていきました。

そのきっかけとなったのは、土曜日補習でした。土曜日補習は、5月12日、6月16日、7月7日の3日間、約1カ月おきに行われまし

た。普段の授業とは違い、生徒3～4人に対しボランティアの学生1人で指導していきます。時間も1時間半と長いのでゆっくりと生徒のペースで学習していく事が出来ました。また、普段の授業時の学校ボランティアより生徒とのコミュニケーションが取れ、授業では見られない生徒の雰囲気が見られたり、日常的な先生との楽しそうな対話を耳にしたりしました。生徒とのコミュニケーションが増えていく中で、緊張がとけて自分自身も楽しんで指導できるようになったと思います。こういった指導は初めてで、悩む部分もありましたが、生徒がどこで間違えているのか、理解できるようにはどう教えたらいいか、よく考えながら指導していく事で生徒の目線・考え方も少し理解出来た気がします。数学が嫌いと言う生徒も多くいましたが、皆わからない問題が解けたりすると嬉しそうでした。その嬉しいという気持ちが数学を好きになるきっかけになれば良いと思いながら、生徒が良い気持ちで学習できるよう努力しました。

土曜日補習は参加する生徒も参加する神奈川大学の学生も毎回違っていて、毎回担当する学年・生徒が変わりました。1回目は1年生、2回目は2年生、3回目は1回目とは違う1年生を担当しました。また、人数によっては全ての学年が同じ教室で学習するため、担当外の生徒の様子も見ることが出来ました。生徒一人ひとり違うのはもちろんですが、学年によっても雰囲気や全く異なり、話していて1学年の差を大きく感じました。色々な学年、色々な生徒と関わることが出来るのも土曜日補習の楽しみのひとつでした。

土曜日補習で分かった事感じた事が普段の授業ボランティアに参加する姿勢の変化にも繋がったと思います。何をしたらよいかわからない時も、何をしたら有効に時間を使えるか、どうやって活動を自分にとってより良くするか考えて行動するようになりました。

学校ボランティアに参加した3か月という期間は本当にあっという間でした。振り返れば、

全部でたった9日間の学校ボランティア活動でしたが、私にとってはとても楽しく素晴らしく有意義なものとなりました。こうした時間を過ごす事が出来たのも学校ボランティアに関わる神奈川大学の方々、そして土沢中学校の方々の協力あってこそそのものだと思心から感じ、皆様に感謝したいと思いました。

本当にありがとうございました。

4.2. 意識を変える

総合理学プログラム 2年 傳田 貴彦

自分は土沢中学校に学校ボランティアに行った。大学の授業との兼ね合いで月曜日の2限しかボランティアをすることはできなかったが、そこで2年生の数学の授業補助をした。授業補助の主な内容は、演習の時間に生徒たちを見て回り、手が止まっている生徒や、わからないところを質問してきた生徒に対して助言を与えることである。その他にも、小テストの答え合わせのお手伝いもさせていただいた。

先ほども述べたが、授業補助の主な内容は、演習の時間内で生徒たちの様子を見て、手が止まっていたり、質問してきたりした生徒に対して助言を与えることである。そして、問題を解いている生徒たちを見ている中で様々なことに気付くことができた。

まず一つは、自分は大学生で、生徒たちは中学生であるということである。当たり前のことと思うかもしれないが、案外このことを意識していないことが多いことに気付くことができた。具体的には知識と経験の量が圧倒的に違うということである。自分たちにとって当たり前で、どこに悩む要素があるのだらうと思っていることでも、生徒にとってはわからないということが多々あった。例えば符号のつけ間違いである。符号をつけ間違えることは大学生になっても、方程式などを解いてときどきあったりす

るものだが、それはあくまでケアレスミスであり、うっかりしていたからということが多い。しかし見ていた生徒の中には根本的なところ、例えば、左辺のマイナスの符号を消したいときには両辺に -1 を掛ければいいということが分からない生徒もいた。自分にとってこれは結構衝撃的だった。自分は2年生のクラスを見ていたので、もちろん生徒にとって初めて出会った方法ではない。他にも分数同士の割り算ができない生徒もいて、自分が思っている以上に生徒の目線に立って教えるということが難しいことを知った。

二つ目は一つ目の内容と関係していることであるが、生徒が知っている範囲の知識で教えることが難しいということである。先ほどのようにマイナスの消し方がわからなかったり、分数の計算ができなかったりと、基本的なところでもつまづいてしまう生徒に対してわかりやすく、かつ、生徒を混乱させないために先生が教えたことと矛盾しないように教えることがとても難しかった。算数を含めればもう10年以上数学に触れてきて、知らないうちに身につけている自分なりの問題の解き方や癖があり、その方法で教えようとしても生徒からしてみればそれは先生に教えてもらった方法と違って、かえって混乱させてしまうことになる。できないことをできるようにするために質問したのに、質問後には、かえってわからないことが増えてしまっは本末転倒である。このような事態を起こさないためにも生徒が今どの程度内容を理解していて、何がわからないのかを正確につかむこと、そしてなにより、教える側が数学の正確な知識を身につけているということがとても大切だと思った。

この他にもいろいろ気付くことはあったが、今回のボランティアの経験を通して自分の考えに大きな変化があった。それは自分が思っているより、もう一段階深く生徒の目線に立つということである。今回のボランティアを通して思ったことは、生徒が質問してくるところは自

分が予想していたところよりも、もっと基礎的なことであるということだ。基礎の基礎ができていないから、新しく習う内容も分からず、それが積み重なって数学ができないということにつながっているのだと思った。なので、自分が教壇に立つようになったときには、今日やる内容はここが大事とか、ここはあまり気にしなくてもいいといった風に、メリハリをつけて生徒が少しでも授業時間内に内容の理解を深めてくれるような授業を作っていけるようにしたい。そして、そのために自分自身がより一層正確な数学の知識を身につけなければいけないと気を引き締めることができた。

土屋小学校・土沢中学校・前期

4 3. 教育環境を整備する力と子どもに接する力

化学科 4年 田中 浩貴

私は、土屋小学校と土沢中学校へボランティアに行きました。土屋小学校での活動内容は、児童の授業補助のほかに給食を一緒に食べたり、校務さんの公務作業のお手伝いをしました。校務作業は、畑やプランターの管理、校地内の樹木の剪定、プール清掃などを行いました。休み時間には、児童と一緒に遊びました。午前中のみボランティアに行ったり、1日ボランティアに行ったりしました。土沢中学校での活動内容は、数学、理科、英語の授業補助を行いました。数学では、練習問題の補助、プリントの解答を行いました。理科も数学のように練習問題の補助を行い、また、実験の補助を行いました。昨年度の春休み中のボランティアでは、試薬棚の整理・チェックなども行いました。英語では、教科書の読み合わせ、課題の補助を行いました。午前のみ・午後のみ行ったり、今年度から新たに1日ボランティアができるようになったので、1日を通して行ったりしました。

一般的に、「学校ボランティア」と聞くと、授業補助や先生の教材作成などの手伝いなどを想像すると思います。私自身も初めて活動する前（2年次）はそうに想像していました。実際に活動してみると、授業補助のほかに校務さんの校務作業の手伝いを行いました。上記の校務作業のほか、運動会の準備や卒業式でのカメラ撮影なども行いました。土屋小学校でのボランティアのように、校務作業をやるようなボランティアは貴重な体験だと思います。今まで児童の立場では校務さんがそのようなことをやっているとは知りませんでした。また、このボランティアを行っていなかったら、校務作業の大変さ、その校務作業を毎日行って学校環

境を整備してくださっている校務さんへの感謝の気持ちを分らないまま教師になっていたと思います。

土沢中学校のボランティアは昨年度の後期から参加したので、今期で約1年間土沢中学校の生徒たちと関わってきました。ボランティアに行く前は、生徒たちに積極的に接していき授業補助ができればいいなと思っていました。また、教育実習を控えていたので、その練習にもしたいと思い臨みました。ですが、私自身人見知りなので、最初是中々積極的に接することができませんでした。春休みのボランティア、今期のボランティアとどんどんボランティアの回数を重ねていくうちに生徒との接し方を学んでいくことができ、授業補助も適切に行えるようになってきました。また、理科室の試薬棚の整理の仕方、実験の準備・後片付けの仕方も学ぶことができました。

そして、ボランティアで少し自信がついた状態で教育実習に臨んだのですが、その時も人見知りになってしまい、なかなかうまく接することができませんでした。地域によって子どもの特徴が違うことなども実感しました。教育実習を終えてからボランティアに行くと、今までとは違った授業補助・参観の仕方ができるようになったり、子どもとの接し方もわかるようになってきたと実感しました。また、子どもと接していくうちに、子どもから逆に褒められたり、感謝されるようになり、とても嬉しくなりました。改めて、教師という職業の魅力を発見することができました。

私は、学校ボランティアで、学校を陰で支える校務作業に関する力、子どもと接する力、他にも様々なものを得ることができました。これらの経験や得たものが無駄にならないように、教師になったら活かしていきたいです。

みずほ小学校・土沢中学校・前期

4.4. 自ら集団へ働きかけることの大切さ

化学専攻 2年 小松 祥子

平塚市みずほ小学校では体育授業内での運動会練習、運動会への参加と国語や理科、算数などの授業見学をしました。また、平塚市立土沢中学校では英語、数学、理科の授業見学、数学の補習指導、朝の職員会議から帰りのホームルームまでに参加する1日体験ボランティアをしました。

みずほ小学校での活動を通して学んだことは、1つ目は、児童や先生方の集団に対し「自ら働きかけること」の大切さです。先生方からの指示を待ち、児童から声を掛けてくれるのを待つのではなく主体的に働き掛けることで、現場に赴く際のイメージトレーニングをすることが出来ました。2つ目は、児童の能力にあった役割を与えることで児童の興味・関心を引き出すことができるということです。授業ではもちろんのこと行事においても運動が不得意な児童や見学で種目に参加できない児童に対して係の仕事やサポート役に充てることで児童たちは生き生きとした顔をしていました。3つ目は、運動会という行事を通して学校や地域がひとつになっていくことです。行事は教員や児童が種目などで一致団結するだけでなく、地域の協力があってこそ行事が成り立つことが分かりました。

土沢中学校でもみずほ小学校の1つ目と同じく、集団へ「自ら働きかけること」の大切さを学びました。小学校では児童の方から話しかけてくれることもあります。中学校では思春期ということもあり生徒の方から話しかけてくれることは少ないのでより一層自ら働きかけなければならないと思いました。週に1回程度、数学の補講に参加することで特定の生徒の計算の

癖や生徒同士の関係性など一斉授業の中では把握しづらいことも容易に把握することが出来ました。また2つ目として職員会議から放課後まで1日中、学校に居ることで休み時間の雰囲気や放課後の雰囲気などを感じることが出来ました。3つ目は、教員の校務の多さです。教育実習では、授業やホームルームなどを任されていましたが、自身のことで一杯一杯でした。その為、周りの先生がどんな仕事をしているのか把握することができませんでした。ボランティアという立場だからこそ見えてくる教員の多忙さ。校務は直接生徒に関わるだけでなく、学校や教育委員会などに関わることも多く、教員が教育公務員であることを改めて学びました。

みずほ小学校と土沢中学校での活動を通して、早く教員になりたいと強く思うようになりました。ボランティア経験を活かして明るく優しい教員になりたいと思います。